
-海憂（みゆう）-

RYO103

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一海憂

【ZPDF】

Z3835C

【作者名】

RYO103

【あらすじ】

恋にいまいち本気になれない高3の男の子がバイト先で知り合った年上の女性に恋をする・・・そんな感じの物語（おおげさかな？）です。

これはまだ俺が18歳の若僧だった頃の話です。

あの頃の俺は、まだ何も目的もなく、中途半端な気持ちで1日1日を送っていました・・・。（文中の場所等は架空の物です）

登場人物

古坂拓斗

高校3年 茶髪にピアス、そこそこイケメンの今時の

高校生

今のところはフリー 恋にあまりマジになるタイプではなかつた
帆苅海憂 23歳 プロサーファーを目指している 男っぽくさ
っぱり した性格の持ち主だが恋には一途なタイプ

津山圭 23歳 海憂の彼氏だが3年前、海の事故で寝たきりに
成瀬愛実 拓斗の幼なじみ 拓斗の事が気になるようではあるが

幼なじみで あるがゆえそれが恋なのか友達なのかはつきりしてい
ない

斎藤雅弥

高木翔人 穂信謙太 拓斗の同級生

関耕作・聰美（せきこうさく、さとみ） 拓斗がバイトをしてい
る海の家 潮騒 のオーナー

潮永俊

大学2年 前本康 27歳 3歳の男の子のよ きパパで

あり海の男

鈴木涼平 大学2年 海の家、潮騒のバイト人

八坂充

拓斗をモデルとしてスカウトしそれから拓斗がモデルの仕事

仕事をやり やすいようにいろいろサポートしている

山根誠

拓斗のマネージャー 仕事に厳しい反面 拓斗の兄貴の

ような存在 俊敏マネージャーという噂も

「おはよー！」「おっすー！」「はよー！」

「ねえ～拓斗～、今日学校ふけたら渋谷でも行かない？」愛実が言った

「渋谷？だりーなーでもビーツせ暇だから、まあ いつか！」

「OK！」

「じゃあ～いつものとこでね～！」

「お～」

「なになに、今田も“テート？”雅弥が笑う。

「違う違う、そんななんじやないよ、愛実とは」「まあ、じいていうなら腐れ縁つてやつ？」

「ふ～ん、そんな感じじやねー気もすんけど・・・。少なくとも愛実はな・・・」

なにいってんだか・・・。愛実とは小学校、中学校、一緒に俺につちや普通の友達だし、たいした関心もない まあ、連れて歩くにはかわいいけど・・・。

今日もだりー授業が終わった。なんかつまんねえ～超つまんねえ～・
・。何かおもしろい こともそうそうないしなあ～。

「拓斗～！」愛実が叫んだ。でつかい声。

「どこ行く？」後から雅弥たちも着いてきた。

愛実が言つ「逆ハーレムだ・・・」

ブツ～思わず笑ってしまった。

それから俺たちは〇〇九へ寄つて愛実のつまんねー買い物につきあつて、センター街を抜けていつも溜まつているモックに寄りこんだ。

「ねえ～拓斗」愛実がポテトをほおばりながら話しかける。

「うん、なに？」「今年の夏休みどうしてる？」

「えつ？ だつて今年の夏は受験対策だろ？」

「え～、拓斗つてばそんな事考えてたんだ～、いが～い！」

「なに、おかしいかよ？」「だつて拓斗からそんなマジな話聞くとは思わなかつた～」

「は～？」

なんだいつたい、俺はどんな風にみられてるんだ？

「ねえねえ～あれはあれ？」「なに？」「ほら、あれだよあれ、ほらモーデルの仕事・・・」「あ～」

そう俺はどういうわけかこの渋谷の街中で去年の夏にスカウトされ、少しばかりモーデルの仕事なんてやっていた。
だからつてどうつて事もなく、多少のお金が入つてくるから適当にやり過ご～していた。

ただ、そんな仕事をいくいつかこなしているうちに芝居にというか演技つていうか俳優にでもなれたらいいな位の気持ちはどこかにあつた。

「実はさ～俺、八坂さんのつてでや、こくつかオーディション？ なんての受けたさ～その1つの事務所からどうこうわけか〇〇もひりゅうつてさ～」

「え～すじこじゅん～」「へ～こんなぢゅらんぽらんなやつ、よく引き受けた氣になつたね～その事務所」

「お～、どういう意味だよ～。」「べつに～」

愛実は少しばかり不機嫌になつた。「でも、それつてしまじす～」くない？」雅弥が言つた。

「でも、親なんかは大学行けつてしまつて言つし、でも俳優？つていうかそういう世界に憧れつてのもあつてさ、正直迷つてるんだよね～。」

「でも、拓斗はさ～大学なんてしように合わないし、勉強嫌い！つて言つてたジャン・・・」

「まあ、それはたしかにそななんだけね・・・」

「つていうか、愛実はどうなんよ？まじな話あ～？」

「う～ん……私も拓斗と似たようなもんかな……。」「テヘヘ。

・」愛実が舌をペロッと出して笑ってみせた。

愛実は笑うと左頬にえくぼが出来て目の辺りがクシャクシャになる。とびきりの美人とは思わないけど。なんかホツとする笑顔の女だ。

「俺はさ～、石吹でバイト～」「えつ？」皆がいつせいにすつとんきょんな声で言った。「石吹って、沖縄の石吹島？」

「そうだよ、他にどつかあるか？」「海の家って事？」「そうそつ。

・・・」「へ～」愛実がぽかんとした顔で雅弥を見ていた。

そこへ、さつきまでチーズバーガーに食らい付いていた翔人と謙太が「俺ら～ちよつこと部活でてそこそこ受験勉強なんかしてあとは、なあ～」「なあ～」「やつぱこれっしょ！」翔人と謙太は自分の小指を立てて自分の彼女の事をいつてみせた。

「勝手に言つてな！全くもう・・・！」愛実はなかば怒り気味にあきれたようにそんな2人を見ていた。

彼女か～まあ、それはそれで羨ましい気もするが・・・。しかし呑気な2人だ・・・。

雅弥の家は俺たちが住んでるこの街でそこそこ工場を経営している、けつこう儲かつているらしい。

雅弥はかねがねやつのおやつさんの工場を継ぐと宣言してたな。だつたら海の家のバイトなんていい社会勉強にでもなるんじゃね～の。

「ふ～ん、そかそか、海の家ね～、いいんじゃね～

「だろ～、そこでだ、実は～、その海の家でさ、もう1人男のバイト探してんのよ」

「へ～そなんだ～」「なつ～！拓斗やつてみね～？」「へ？なんで俺よ～」

「だつてお前、男の俺でさえ惚れる様な色男だり?」 「なに、気持ち悪いこと言つてんのよ!…?」

「げへ、きもい!雅弥、そんな趣味あつたの?ありえな~い!」 そりやそりや、俺だつてそんな氣はない。^け冗談じやない。

「ジョーク、ジョークよ!」 「でもさ~、拓斗位の面構えならさあ、拓斗がそこに居るだけで、女の子が寄つてくるかもしないだろ?」

「したらよ~、海の家も儲かつかもしんねえし、バイト代も上がるかもしんねえ~べ!」 「俺は密寄せパンダかつ~の…」

「あはは・・わり~わり~」

「でも、バイトの話はまじよ、まじ。」 「だつて海の家の仕事つて、めんどいしそうじゃん、暑そだしつ~」

「まあ、そういうなつて、海でよ、密の注文とつてそれを密に渡したり、ボード貸し出したり、浮き輪貸し出したりしてよ~んで、適当にかわいい子ナンパして適当にいただいて…」 「なんだ、そのときとつて!」

「そりだよ、女をなんだと思つて~いるのや~」 愛実の顔はふくれつ面だ。そりや、そりだよな・・・。雅弥つてばデリカシーなつていか、空氣読めないつていつか・・・
「だつてさあ~だつてそつだろ?」 「なにがだよ?」 夏の海に遊びに来るような女つてさ~ナンパ田当てかそうでなきや、彼氏持ちかいくらかくたびれかけてきた家族連れみて~なのが多いじゃん。」 俺は時折、雅弥の考えて~いる事がわからなくなる。

お前の頭ん中はどんな構造してんだ?女の事ばつか考えてんのか?
これが未来の社長かよ。

「そんなんに氣張らずむくつと、むくつといい女、いただき~みたいなあ~」

はあ~いつまでも言つてやる~!

「でもさ~拓斗」「うん?」「このまままだぼ~と夏休み過ご~すよ
りは、「うん」

「何かしらの経験とかしたりしてまあ～それが良くても悪くってもお金になるんだつたらそれもなんかよくない？」

「まあ～そういう事もありえなくはないね・・・。」「だひ～これで決まり～」

「おいおい、気が早いなあ～で、いつ頃から行きや～いいわけ？」

「あつちはもう観光シーズンだから早ければ早いほうがいいみたいなんだよ」

「だいたいどの位、行けばいいの？」愛実が聞く。

「2～3ヶ月位だと思つよ」「え～、長いなあ～」

うへ～そんなに長いのか～、このバイトは受けるべきではなかつた気がしてきた・・・

その時、俺はそんな風に思つてはいたけれど、だからつて断る事でもないのかな・・・?なんて漠然と考えていた。

きつとその時から俺はなにか運命みたいなもの、俺の一生に関わるなにかをそこに感じていたのかもしれない・・・。

「圭、調子はどう? ちょっと雲行き悪いけど大丈夫かな?」「海憂、心配ないよ、この位、どうつて事ない……」

今朝方、南西諸島の発生した熱帯低気圧は台風9号へと変わりました。

台風9号の進路にあたる地方の方は急激な天気の変化にお気をつけ下さい

「台風9号か……大丈夫なのかな?」

3年前の夏、圭はプロサーファーのテストを受けていた。

圭と私は同級生、同じ大学のサーフィンサークルの仲間で、圭は将来、プロサーファーになれるぞと期待されていた。

彼のサーフィンは力強くて綺麗で小麦色の肌と真っ白な歯とブロンドの瞳が印象的だった。

私は初めて彼に会った時から彼の事が大好きになった。時折、みせる翳りつていうかとても

二十歳にはみえない落ち着いた雰囲気が素敵な人だった。

私が、彼と恋に落ちるのにさほど時間はかからなかつた。

「大丈夫だよ、圭は!」康さんが言つ。

康さんは圭の4つ上の大学の先輩でもうすぐ待望のお子さんが産まれる。バリバリの海の男、私たち2人の事を何かと面倒みてくれた人だ。

「おーい……圭……上がれー上がれー!! でかいねりが来てる

ぞー！おーい、けーい！！

ドドーン・・・

大きく波が崩れる音がした。辺りを一瞬、静寂が包んだ・・・。

「おーい、救急車、救急車、誰か救急車呼んで～ 早く早く！～」
「早く、上げてやれ～～～！」

何？何があつたの？私は圭がどうなつたのか、何が彼の身におきたのか、理由もわからないままただそこに立ち尽くしていた。ただ、だんだんと遠くなつていくサイレンの音だけは覚えていた。

あれからどの位の時間が経つたのかな・・・ 病院の待合室でボーッとしていたら

「海憂ちゃん、海憂ちゃん・・・」康さんの聞き覚えのある声がした。

「いいか、しつかりするんだぞ・・・」康さんはただ一言それだけを私に言った。

202号室、その部屋に通された私は愕然とした。そこには顔に擦り傷をおつて目を閉じたまま青白い顔をした圭が横たわっていた。

今、私の目の前にいる人は誰？圭、圭なの？さつきまであんなに元気で一生懸命波を追つかけていた圭なの？海に入る前、「頑張つてくれるから・・・」と言つて優しくキスしてくれた圭。

私が落ち込んでいる時、いつもそばにいて肩を抱きしめてくれた圭。優しくつて強くつて私の大好きだつたその人はそれからずつと眠りについたままになつてしまつた。

端正に整つたその顔は、私をいつそう悲しませた・・・。

「どういう事ですか？」康さんが病院の先生をどなりつけた。

「ですから、津山さんは皆で頭と首を強打されてまして、その言いにくいんですが・・・」

「リハビリすれば回復するんじゃないですか？また、サーフィン出来るんじゃないですか？」なおも康さんは先生をどなりつける。

「ですから、先ほども申し上げましたが、津山さんは頭と首を強打されていてリハビリどころかこのまま寝たきりの状態になってしまふんです」

「そんな、そんな事あるか～、そんな事つて・・・」いつも冷静で明るい康さんが涙を流して言葉を詰まらせた。

「きつい言い方になつてしまいますが、あれだけの事故で命が助かつたという方が奇跡なんですよ・・・。残念ですが・・・」

圭がこのまま寝たきりになるなんて、その時の私はあまりのショックと襲いかかつてくる現実を目の辺りにして泣くことも出来なかつた。

涙も出ては来なかつた。口さえも開けないでいた。

ねえ～圭？これから私は何を支えに、何をどうやって生きていけばいい？一人残された私はどうやって生きていけばいいんだろう？

目の前にいる圭は何も答えてはくれなかつた。

それから、私は奇跡を信じて彼の顔を毎日見に行くよになつた。いつ行つても私の事などわからぬと思つていても、それでもそんな毎日でさえ不思議と幸せを感じていたんだ。

長い闘病生活の中でも圭がたつた1度だけ涙をこぼした時があつた。だからといって圭が目覚めることはなかつたけれど・・・。

きっと、圭は悔しかつたんだろうな、あんな事故さえなければ

あなたの幼い頃からの夢だつたプロサーファーになれてたかもしないんだもんね。

私はその時の圭のその顔を忘れることが出来なかつた。私が圭の代わりにプロサーファーを目指そつ・・・。彼の夢、叶えよう・・・。

圭の身体は日に日に元気をなくしていった。逞しく分厚かつた胸板も、真っ黒に焼けた肌も、す一つとのびて綺麗な指も一まわりも二まわりも小さくなつていつた。ただ綺麗に整つた顔立ちだけは不思議と変つていなかつた。

こんな事言つたらおかしいかもしれないけれど、それでも圭はかっこよかつた。

あ～あち～

「おーい！拓斗！」

「へ～い！」

ここ海の家、潮騒にバイトに来てから3日目。少しづつ仕事にも慣れてきた。

しかし暑い！猛烈に暑い！汗ひでば、こんなに暑いことにだつたのか・・・？。

「おい、拓斗！これあそこのお宿さんには届けて！」

「はいは～い！」

「はいは一回だけでしょ！」女将さんが言つ。

ここ海の家、潮騒の経営者の関さん夫妻はよく働く、朝から晩まで笑顔を絶やすことなく働く。

あのパワーはどこから出て来るんだ？

女将さんは歳のわりにはさばけていて明るくて面倒見のいいおばちゃんなんだ。

ここ潮騒がこんだけ忙しいのもわかる気がする。

なんか2人をみると楽しそうだし、なによりも2人とも海が大好きっていう感じが湧き出でてる。

暑さの中での仕事はきつにけど田の前にある海を眺めていると元気がよみがえつてくるつていうか、パワーをもらえるつていうか、そんな感じがする。

そんな気持ちでそれから1週間が過ぎた。

俺もかなり日に焼けて肌の痛さなんて忘れてきた。

「」でバイトをする目的、目的？とはいわないか・・・。

とつあえずかわいい子でもナンパしてそれなりに楽しもうといつ本題は全くといつていいほど果たされていない。

そんな暇さえもほとんどない。暑さと忙しさの中でのんびりこんな仕事も悪くないなって思つていた。

たまに休憩なんてのがあって海辺に行つてもすぐウトウトと眠くなる。でも、こんな暑いところでウトウトとじよつもんなり身体のあちこちがジリジリこころる気がして、なおこいつをつ疲劳がたまつていく。

雅弥とて同じ。ナンパなんてのは出来るわけもなく、あてがはずれてややへこみ気味だ。

「人生なんてそう甘くないなあ～」雅弥がポツリとつぶやく。んなの、あたりまえろ・・・。

でも、俺も雅弥と同じこと考えなくもないんだけれど・・・。

「こひらは～ー！」

「やあ～みゆづかやんー！」

「ひま～おやつさん！景気はどひよ？」

「まちほちだね～」

「やひいつみゆづかやんの調子はどうなのよ～もひすぐプロテストでしょ？」

「うん、やうなんだナビ、なんかいまいちね、調子が出ない感じ・

・」

「やうか～でも、まあ、もうちょっとがんばってみー！」

「はいよーじゃ～こつものかき氷ちよづだいー！」

「あいよー！」

「あれ～新入りくん？」

「あ～こつ、ひひひの夏バイトして拓斗つてこの、古坂拓

斗

「拓斗、ちゅうといひつかこーー！」

「こひらは～ー」

「ここにちは！帆苅海憂つていいます。よろ～」

「はい、古坂拓斗とあります」

「じゃか・・・ぐるつて言ひのへ鶏の頭みたいな名前へあはせ・・・

「違います。古坂つていいます。」・さ・か・・・

「あ～ごめんね～、古坂君ね。あらためてよろしくね～」

「古坂君、綺麗な顔してるね～ 若～い ちょっと生意氣わ～・・・

」

「あ～、じめん、じめん」

は？なんだこの女、やに色黒くね？まるで男みたいだ。なにがととかく～んだ。

気が強そうな女！逞しい女！海の女ってこんなもんなのかな？俺が初めて彼女、海憂に会った時、正直、女としての魅力や優しさなんて感じていなかつた。

「古坂くん、古坂くん！かき氷ちょうどいい、いつものね～！」

「帆苅さん、今日もかき氷つすか？」

「いいの、いいの。これ食べないとなんか調子でないんだもん」

「みゅづちやんは本当にかき氷好きだね～」康さんが笑つてゐる。

「いいじゃんね～おいしいんだもんここのーねつ！古坂君ー！」

「帆苅さん、拓斗でいいっす」

「え？ だつて・・・」

「ここの人俺の事みんなそう呼ぶから」

「そり、じゃ、遠慮なく 拓斗！」

彼女に自分の名前を呼ばれた時、まじに照れた。そして胸の奥がわけもなく”キュッ”となつた。

「私の事はみゅづちいよ。みんなそう呼ぶから・・・ねつー。」

「はあ～」

みゆうはそれから毎日毎日波乗りの練習が終わると、じーじー潮騒でかき氷をほおばつた。

いつも明るくって、いつも笑ってて、時には怒ったりして、その表情がクルクルクルクル変わる。

早めに海を上がってきたと思ったら、またふいつと海に入っていく。彼女が海へ行く時、ふと香ってくる髪の香りが俺の心をいつもドキリとさせる。

なんか不思議な女だ。そんな彼女の事を見ていらうか、俺は彼女の事が気になり始めていた。

ある日の午後、海水浴に来ていたお宿さんの子供が溺れかけそうになつた時があつた。

その時、真っ先にその子供を助けたのが拓斗だつた。

拓斗のその時の顔が18歳にはみえないほど逞しく感じたんだ。

もしかしたら私は、その瞬間に5歳も年下のその生意気な男の子に心、さらわれたのかもしれない・・・。自分自身も気が付かぬいうちに・・・。

「拓斗ー！」どつかで聞き覚えのあるでつかい声。愛実だ。

「愛実ーどうした？」

「うん、バイト休み取れたから思い切つてきちゃつた！」

「はあ？」相変わらずとっぴょうしのない行動をする女だ。

「でもね、宿、一泊分しかとれなかつたよ～残念！」

あたりまあだる、こんな最盛期の海の宿なんて、一泊だけでも取れたのが奇跡だと俺は思った。

「拓斗が下宿している近くのK'sea-s って言うペンションだよ」

「しかし、お前もよくこんなとこまで来たな～」

「だつてもう一〇日も拓斗に会つてないんだよ～」

「そりかあ～もうそんなに経つかな～・・・」

「そうだよ～もう拓斗つてばつれないなあ～」

愛実の久々の笑顔はみょうに懐かしかつた。

「じんとい忙しかつたからな～・・・。

愛実は俺の腕にからみついてゐる。

俺はその愛実の手をふつけひつでもなく、愛実のしたことによつてわせ

ていた。

相変らず元気なやつだ・・・。

俺はなんとはなしに愛実の肩越しに見える海を眺めていた。

その時、海憂の姿が目に止まつた。

彼女は夢中になつて波を追いかけている。

波を追つている時の彼女は海の家潮騒ではしゃいで笑つてかき氷を口いっぱいほおばつている彼女とは別人だ。

真剣な眼差しでいい波をみつけ、タイミングよくボードを滑らしていく。

風になびく長い髪が女を感じさせる。けつこういい女なんだな・・・。

なんだろこの言ひょうのない感情は・・・?

もしかしたら、俺は彼女の事、好きなのかな?まさか・・・でも・・・

・

「拓斗〜!」愛実がでっかい声で俺を呼んだ。

ああ〜今日は、調子、わる〜!なんでかな?

あれ?拓斗だ。女の子と歩いてる・・・

彼女?なのかな?拓斗と同級生くらいかな?やつぱ若いね〜かわいいな〜

あの子と居る時の拓斗ってあんなふうに笑うんだあ〜。

・・・・・

なんで拓斗とあの子の事、こんなに気になるんだろう?

私には圭がいるじゃない、圭が・・・

でも、この何日か拓斗と話したり、海で一緒に泳いだりしている時は圭の事、一度も思い出したりしなかつた・・・。

拓斗と出会つ前はそんな事なかつたのにな・・・。

でも、今、自分の目の前に見えるその光景を私は見れなかつた。
嫉妬？まさかね・・・。

おかしいの・・・。『らーしつかりしろ！海憂！

でも、自分の気持ちには嘘はつけないな。

その時から彼は、私の心の中に確実に入り込んできただんだ。

あ～あつ～・・・」愛実が目覚めた。

「げ～まだ朝の4時じゃん。さうだ、拓斗んといこひやお～、もう起きてるかな？ま、いいや」

トントントントン・・・。愛実は軽快に拓斗の下宿しているアパートの階段を上がつていった。

愛実は拓斗が下宿しているすぐ近くの宿に泊まっていた。

「おはよ～！」「・・・・・」

「おはよ～！拓斗！」

「えつ！」俺はまだ寝ぼけ眼のまま起き上がつた。

「愛実？なんでいんのよ・・・・！」

「えへへ・・・だつて田がさぬひやつたんだもん・・・・。」

「えへへ・・・じやないだら～まじかよ～もつ少し寝かせてくれよ

」

「だめだめ、起きて！私、今日はもう帰らなくひやいけないんだから・・・。少しでも長く拓斗といたいの！」

「は～！？」意味がわからん。ま、いいか・・・

「んじや、ちよつと海にでも行つてみるか？朝の海は氣持ちいいぞ

」

「え～、ま、いいか。じゃあ、その帰りコンビニ寄つて朝ごはん買おうよ！ねつ！」

なんか愛実は嬉しそうだ。俺はまだ半分眠くてしょづがなかつたけれど・・・。

トントントントン・・・

下宿の階段を2人は並んで下りた。

「わ～本当だ、海がきれ～～！」「だろ～～」愛実は楽しそうに笑っていた。

「あれ～拓斗じゃない？おはよ～ずいぶん早起きだね～」
一瞬、俺はその声にドキッとした。なんでこんなところで・・・
「あ～！海憂さん～おはよひびきであります」俺は極力冷静を装つて挨拶をした。

「ね？誰？拓斗」愛実が俺に聞く。

「あ～ここで知り合つた海憂さんっていうんだ」

「帆苅海憂とこ～ます。よろしくね・・・」

「成瀬愛実とい～ます。拓斗の同級生です。どうじても拓斗に会いたくて来ちゃいました。」

「あり、そうなの・・・」

「海憂さんはこれから練習ですか？」その時の俺はきつとじつといいかわからない顔をしていたに違いない。

どう考へても愛実が俺の部屋に泊まつたにしかみえないもんなん～。言い訳がましく言つのも変だし・・・。頭の中が真つ白になつた感じがした。

「じゃ、練習しなきやいけないから、またね、拓斗

「はい・・・また」なんかそつけないな～どうしたんだろう？

あの子は拓斗のなんなんだろう？彼女のかな？やっぱそうだよね、こんなに朝早く、しかも彼の下宿先から2人で出でてくるなんて普通な関係ではないよね・・・。痛つ！やだ私つてばこんなことでこけるなんてどうかしてる・・・。なんだか涙が出てきた・・・。

「海、行つてみるか？」「うん、そうだね。」俺はとりあえず愛実を海に連れ出す事にした。

「ね、拓斗？バイトビう～～」「うん・・・」「かわいい子ナンパ

した?」「うん、まあ~」「この服どう?」「あ、いいんじゃない」「ね、拓斗? 海憂さんてどんな人?」「えつ……」「どんなつてべつに……」「

今日の拓斗はなんかへんだ……どつか上の空っていうか、私の事なんて眼中にないつていうか……舞い上がってる感じ。特に海憂さんに会つてから……

「拓斗、拓斗つてば!…」「えつ、なに?」「さつきからどこ見てんのよ!」「どこつてべつに……」

「べつにじやないでしょ、海憂さんの方ばっか見てるー私の事なんて見てないでしょ!」俺はハツとした。

愛実を自分の目の前に置きながら俺は海憂の事ばっかり田で追つていた。

「最初からわかつてた、拓斗が私の事、幼なじみにしか思つてないつて。それでも私は拓斗の事が好き!」

愛実が抱きついてきた。

その時、大きな波が碎ける音がした。

「おい、愛実、いつたいどうしたんだよ?」「……」「おい」「顔を見上げた愛実は涙顔だ。

「拓斗のばか!…もう、帰る……」

愛実がもうダッシュで走つて行こうとする。「おい、愛実、ちょっと待てよ、おい!…」

2人の姿が私の視界から消えていく……。拓斗は彼女の事好きなのかな?

たぶん、あの愛実ちゃんて子は拓斗の事好きなんだろうな……。拓斗はどう思つてるんだろう? きっと好きなんだろうな……。

若くてかわいらしこあの子の事……じゃなきゃ拓斗の部屋から

こんなところで私は撃沈するんだ・・・そんなのってそんなのってや

だ
・
・
・
。

和ではこのかに彼の喜びなが
このかにモ喜びなが

私は「」み上げてぐる涙をぬぐう事が出来なかつた。

「愛実、おい！」拓斗、拓斗って私の事好き?ね、答えて、今すぐヒロで答えてよ

「なんで、お前、急にそんな事言つんだよ?」

「だつて、拓斗、わかりやすいんだもん！あなたが今じりでどんな事、考えてるか私こまつかる。」

「何がわかるっていうんだ？俺の何がわかるって言つんだ？なつ、

愛[美]？」

「拓斗は拓斗は海憂さんの事好きなんですか？」

あんたの気持ちが私にはわかる！」

図星だった。俺は海憂に初めて会つた時からきっと好きになつてい
たんだと思う。ただそれに気が付かない振りをしていたんだ。
彼女は俺より5つも歳が上だし、俺の事なんてガキだと思っている
に違ひない。

でも、そう思われてもやつぱり俺は海憂が彼女の事が頭から離れなかつた。こんな気持ちは生まれて初めてだつた。

「拓斗、一つだけ答えて・・・」愛実が泣きながら言つた。

「私の事、少しは考えてくれてた?私の事、少しでも好きになつて

「うれしくてたまらない。」
「うれしくてたまらない。」

「正直、俺はお前の事は幼なじみとしてしか見ていいなかつた、」じめ

ん、でも、『れだけは言つ、お前の笑顔に俺は何度となく助けられたし

ホツとしたりもした、でも、海憂に対する俺の気持ちと愛実に対す

る俺の気持ちがあきらかに違う

「拓斗、正直だね……」「お前に嘘を言つてもびづせバレバレだろ?」「だね……」

「でもね、ここへきて拓斗みてたらなんとなくわかつてたよ、なんか、拓斗、楽しそうだつたし……」

「私も、きつぱり拓斗の事はあきらめる……しばらくなは、辛いだろうけど。バイト先でね、ちよつと氣になる人いるんだ」

「愛実、嘘をつけ! そんな余裕はお前にはないだろ?」「へへ、バレたか……」

「当たり前だろ、何年、お前と付き合つていると思つてんの?」「だよね」

「でも、拓斗の本当の気持ちわかつたら、なんか安心した、安心? つて事もないか……」

「正直に本当の気持ち教えてくれてありがとう」「愛実、俺のほつこや、悪かった、お前の気持ちに気づかなくつて」

「うん……んじや、私、もう行くね! 学校で会おうね! 下手に氣を使わないでね、悲しくなるから、今まで通り、幼なじみのおばか同士で行こう!」

「なんだ、それ?」「いいじゃん、ばかなんだから……」「まあな~」「バイバイ~イ!…」

少し元気になつた愛実はその日に帰つて行つた。

愛実には悪いと思つたけど、愛実が帰つた後、俺はまじにホツとした。

もう、これ以上、海憂に誤解されたくないつたし、海憂の事をじつ

くり考えたりもしたかったから……。

その時、愛実が泣きながら歩いていたなんて、これっぽつちも考え

もせずに・・・。

その後、いつも海憂が波乗りの練習をしている所にいつてみたけれど、海憂の姿はどこにもなかつた。

愛実が東京に帰った後、みゆうはしづらへりじ海の家潮騒に姿を見せなかつた。

彼女がいつも波乗りの練習をしている場所に行つても彼女の姿は見えなかつた。

俺は彼女に会えないその一日一日を長く感じていた。みゆうに会いたいな。まじで・・・。

風邪でもひいたのかな？怪我でもしたのかな？

そんな日が続いてしばらくした後、彼女はここへやつてきた。

俺はまじで嬉しくて彼女と早く話しがしたかつた。

そん時の俺は顔が赤かつたかもしれないな・・・。信じられないけど。

「拓斗～！」

「みゆうさん～おっす、ひわしづりっす！」

「みゆうちゃん！ひわしづり～」「みゆうさん！」

バイト仲間の康さんや涼平さん、俊さん、そして雅弥がみんな挨拶をしていた。

「よ～！みゆうちゃん！」「あ～おやつさん～おひか～」

「みゆうちゃんがしばりく海に来ないなんて珍しいね？どうか怪我でもしたか？」

「う～ん、怪我はしてないよ、ちよつと風邪ひっちゃつて・・・」

「風邪？珍しいね、いつも元気印いっぷぱいのみゆうちゃんが風邪なんて・・・」

「康さんは、ばかは風邪ひかない！-とでも言いたいんでしょ？」

「そりは言つてないよ・・・」

「あはは、康さんたら・・・、おもしろいの～」

そこにはいつもの海憂がいた。俺はそんな彼女を見てホッとした。

ただ、康さんはそうは思つてなかつたみたいだけど……。

そん時、康さんがつぶやくように小さな声で言つたんだ。

「みゆうちやんは風邪ひいても怪我をしてても練習だけはさぼらなかつたんだけどな……」と。

嘘ついちゃつたな……。私は風邪なんかひいてなかつた。

あの朝、拓斗と彼女を見かけたあの朝から心が重くつて辛くつて海に行くのも嫌だつた。

それになによりも拓斗を見るのが辛かつた。

拓斗の横になぜ私は並んでないんだろう? なんであの子が拓斗の横に居るの?

なんで、拓斗の横に私は居ないんだろう? そんな事をずっとずっと強く思つて、ともかく彼に会うのが辛かつた。

それだけだつた。

これまで、私の横には圭が居て、彼の存在が大きくて彼以外の男の人なんて目にも留まんなかったけど拓斗は違つた。

いつの間にか、拓斗の存在は私にとつて圭よりも大きく、そしてずっとそばに居てほしい、そんな人になつていた。

でも、彼は私よりも5歳も年下。そんな男の子が私の事なんて相手にするわけがないな、あきらめたほうがいいのか。

でも、それもやっぱり辛い事。そう思えばそう思うほど苦しくなつて、ならいつその事片思いのままでもいいなんて

彼がそこに居てくれればそれだけでいいなんて、そういう風に自分の気持ちを整理するのに時間がかかつたんだ。

拓斗……それでも私はあなたが好き!

「おやつさん!」「なんだい?」「今日、拓斗、借りてもいいかな?」「へ?」海憂が突然変な事を言つた。

俺はレンタカーじゃないんだぞ。そう思いつつも俺は正直嬉しかった。後はおやつさんの返事を待つだけだ。

「いじょーいじょーただで貸してやるー、はつはつはつー。」

おこおこ、おやつさん、勘弁してよー。でも、まじ、嬉しかったな。

「なー拓斗、いいだろ?」

「俺は別にいっすけど、店、大丈夫ですか?」

「なーに、今田はそんなに忙しくないからみゆひかさんにおかれ合ひてやんなー」

「んじゃ、もうせせてもらこますー。」「あこやー」

げ~ちゅ~ラシキー! 海憂とトーートだ~。『トーート? わひじやないよな、これはやつぱり・・・。』

でも、たとえ少しの時間でも海憂と一緒にいられるって事は・・・もつ最高の気分。俺は自然と笑みがこぼれて止まらなかつた。

海憂からの突然の誘いに俺は驚きながらも彼女と2人で一緒にいられるつていう事が妙に嬉しくつていつになく自分の心のテンションが上がつていると感じていた。

海の家 潮騒からさほど遠くないところにパーキングがある。

海憂はせつせとそこへ歩いて行つた。俺も彼女に遅れまいと必死に彼女を追いかけていた。

歩くのはや～。でも、そんな小さな時間さえも今の俺には宝物だ。彼女のちよつと華奢な背中^{きやしゃ}が愛おしくてならなかつた。

このまま、後ろから抱きしめたい。俺はそんな妄想を勝手にふくらませながらなんかひとりあせつていた。冷静になれ！オレ！！

「 もや、乗つて乗つて！」

「 こーの車にですか？」

「 そうよ～これは私の相棒！」

「失礼しま～す」

そこには海の色に似た綺麗な青い4WDの車があつた。いかにも彼女らしくシンプルでなんのかざりつけもないけれどどこか小洒落た感じの車だ。

車に乗り込むと彼女の匂いがした。

「 拓斗、私の隣に乗れるなんて幸せもんだぞ！」

彼女はそう言つて舌をペロッと出して笑つた。こいつ、最高…おつと、何を考えてるだ・・・でも、やっぱ、いい女だ～。

私つてば、何、言つてんだろう？大胆な事、言ちやつたなあ～。でも、

本気で言つたんだぞ！拓斗！ なんてね・・・私のほうが幸せなかも・・・。

国道をしばらく走つてから小さなサーフショップに着いた。なんかどこか暖か味のある店だ。店の中に入るとそこには、オレンジ、青、赤、黄色等々色とりどりのボードが所狭しと飾つてある。かわいいTシャツや、ポロシャツ、ウエットスーツなんかもセンスよく飾つてある。

あのTシャツ海憂に似合いそう・・・また妄想が始まってしまった。やべえ。

「ねえ～拓斗、どのボードがいいか選んで！」

「なんで、いきなり、俺、ボードの事なんてあんまわかんないっすよ」

「いいのいいの、どの色がいいかだけ選んでくれればいいから～ねつ！」

「は～」最初にここ の店に入つてから一つだけ気になつていたボードがあつた。

素人の俺でもいいなあ～つて感じるボード。それは、青色のボードだった。一口に青といつても色々種類があるけれど

そのボードの青い色は表現しようがないほどに綺麗な色をしていた。

「俺は～これがいいと思うんですけど～」

「えつ？これ？」

「はい」

「へ～拓斗、センスいいね～実は私もこれがいいなあ～つて思つてたのよ」

「そ～なんすか？」俺はすつとんきょんな声を出していた。

でも、海憂と趣味が合つたなんて俺には快挙だ。なんか、みょうに嬉しい。気持ちが暖かくなつた。

「んじゃ、これにしようと！これに決めて！」海憂はいつになくはしゃぎながらそのボードを小脇に抱え店の奥へと入って行つた。

なんか嬉しいな～拓斗と趣味が合ひやつた。うふふ・・・私はそのボードをかかえて一人微笑んでいた。

手持ち無沙汰になつた俺は店の中を見て回つていた。
その時、俺の目の前に飛び込んできた綺麗な青い色の石で作つた指輪とブレスレットがあつた。

「ターコイズブルー（トルコ石）ターコイズは魔よけの石と言われています。

持ち主に危険が迫ると、身代わりとなつて石が割れたり、色が変化したという伝承が多くあります。

なぜか、ターコイズの不思議な力は人に『えられる』ことによつて倍増するといわれていて、大切な人への贈り物とする宝石といわれます。特に、愛する人から贈られたターコイズのリングは、絶大な守護力を發揮すると言われています。」

魔よけの石か・・・。今度プロテストがあるつて海憂が言つてたな。俺はそこにあつた指輪とブレスレットのどっちを買おうか悩んだけれど指輪はちょっとガラじやね～か！と思いつのそばに置いてあつたブレスレットを選んだ。

「お待たせ～」海憂が店の奥から出てきた。
俺は、いま買ったそのブレスレットをポケットの奥へとしまいこんだ。いつ渡そうかなんて考えつつ・・・。

それから俺たちは海沿いのファミレスに寄り込んでランチを楽しみつついろいろな話をした。

学校の事、海の話……。その一つ一つの話に俺たちは笑いあい真剣に話をしたりして盛り上がっていた。

そんな楽しい時間はあつとていつ間に過ぎていった。

「んじゃね!」海憂が言つ。

「はい」

俺がそういうて車を降りようとしたら

「拓斗~今日は付き合ってくれてありがとう~」そう言いながら俺の肩を引き寄せ彼女は俺の頬にキスをした。えつ?

「今日のお礼!」海憂は照れたようにそいつた。

そんな海憂が愛しくつて俺は自分の指で彼女の唇に触れた。そして、彼女のその唇にキスをした。

一瞬、びっくりした海憂の身体をきつく抱きしめながら俺は言つた。

「海憂、愛している・・・海憂・・・」

「拓斗、初めて私の名前呼んでくれたね・・・。」彼女の頬から涙があふれていた。

俺は彼女の涙をぬぐいながら

「これ・・・」今日、あの店で買ったターコイズブルーのブレスレットを渡した。

「えつ?いいの、もらつていいの?」

「うん、海憂のために買ったんだ」

「あ、ありがとう、嬉しい、大事にする、これ拓斗だと思つて大事にするね」

「拓斗・・・」

「うん?」

「私も拓斗のこと、あ・い・し・て・る」

「まじで・・・?」

「うん・・・」

そして、俺たち2人はお互いを抱きしめあいそして2度目のキスをした。

遠くで波の音がかすかに聞こえていた・・・。

海憂と俺の、2人の気持ちが通じ合つた日から何日か経つた。
もつこにバイトに来てからどの位経ったかな？

2人で買い物に出かけたその日に俺たちは初めてのキスをした。
俺はその日からなおいつそう、今までいじょうに彼女のことを好きになっていた。

彼女をいつでも自分のそばにおいて、彼女のことをたくさんたくさん抱きしめたい。

彼女の唇にもつと触れていきたい。

どうかしてるかな？俺？仕事も失敗ばかりしている。情けないな・・・。

「おい！拓斗！」

「あ～雅弥、お前の忙しい時にびっこつてたんだよー・・・」

「わり～わり～、ちょっととな・・・」

「まったく、冗談きついぜ！」

「へへへ・・・お前に紹介しておきたい人が居るんだよ」「俺に？・・・

「うん」「わ～い、こっちはち・・・」

「こんにちは～」

「こんちは～」そこには見たこともない女の子がちょこんとお辞儀をしていた。

「おい、雅弥～誰だよ、あの子？」俺は雅弥の腕を引き寄せた。

「へへへ・・・とつとう出来ちゃった、俺の彼女」

「彼女～？いつのまに～、でも、けつこうあの子かわいいじゃん」

「だろ～、あ～でも、拓斗、お前、彼女を誘惑なんかするんじゃね～ぞ！」

「なに、ばかなこと、言つてんの?」「俺だって、彼女くらい……」

「え~お前にも出来たの?まじで~いつのまご~」

「いや、違う違う、うなもの出来てね~よ」「ほんとか~?」「まじで!」俺はなんだか慌てふためいていた。

俺だって本当は言いたい、声を大にして言いたい。俺の彼女は海憂だつて。

海憂にまじで惚れました……。なんて言つてみたつて。でも、なんとなく雅弥に気が引けて俺はその言葉を飲み込んだ。海憂と俺の2人の秘密にもしておきたかった。なんでその時、そう思つたんだろ?~

「あ~あらためて紹介するね、ここに、拓斗つて言つの、俺の同級生」

「こんちは~古坂拓斗つて言います」

「はい、私は山本美咲つてこります、よろしくです」

なんか雅弥にはつりあわないようなおとなしめの子だな~。

「彼女さ~明るくつて優しいのよ、どことなくみゅうさんみたいな感じだと思わない?」

なにいつてやがる、海憂とは似ても似つかないぞ!俺ははうつぱり腹がたつた。

「なんかさ~彼女と俺つてさ~価値観が一緒つていつかなんか運命感じちゃつたりしてるんだよね~」

「お前、恋愛ボケしてんじゃね~の?」

「なんだよ~その言い方……なに、怒つてんだけ!」

「怒つてなんかね~よ!」

「そりゃ?ま、いいや」

「拓斗～雅弥くん！」海憂の声だ。俺は一人ドキドキしていた。

「海憂さん～」

「んちば～」

「ちば～っす！」

「海憂さん、今日も海？」「うん、そうそう」

「頑張りますね～」「まあね～あれ？彼女どなた？」

「あ～紹介します、俺の彼女の山本美咲さんと言います」

「お～い！みさき～」

「うわ～、みんなさん、プロサーファー田嶋してんだぜ、かつこ

い～べ～」

「へ～そ～うなんですか、す～る～い」

「あら、そ～うなの、雅弥くんも隅におけないわね～」ケラケラと海
憂が笑つた。

なんか、す～く若い子だ～18歳位かな？拓斗とおない年か・・・。

「山本美咲と言～ます」

「あ、そ～なの、かわいい名前ね～、よろしくね～」

「なんかさ～彼女とはおない年のせいか、みょ～うに気があつちやつ
て～」

「やっぱタメ年だと樂しいつすよ～」

「やつ～うかもしれないわね・・・」

「おい、雅弥、よけいな事、い～な！　今、お前、完璧地雷踏んだぞ。
空気が読めない男だな！」

俺があせりながら、どのタイミングでこの言葉を言おうかと考えて
いるうちに海憂の顔色がみると変わっていくのがわかった。

「んじゃ、俺、そろそろ店戻るわ～」

「お～、あ～雅弥～！」

「なに？」

「おめでとう～～～

「なんだよ気持ちわら～～、でもありがとなー！」

雅弥はめちゃくちゃに嬉しそうな顔をして美咲って子と手をつないで店の方へと歩いて行つた。

そんな2人の姿を見て俺は正直羨ましいと思つた。

俺も海憂と手をつないで堂々と俺の女で～す、なんて言つてみたいとそう思つていた。

そんな俺の気持ちを知つてか知らずか海憂がぽつりと言つた。

「なんで、だまつてゐるの？私とのこと、みんなこひびいてるの？
それつて私が年上だから？ね、拓斗、どうなの？」

「なんで、なんでそんなこと言つの？海憂？」「だつて・・・」

「そう、思つてんの海憂だけなんじゃないの？」

「俺はそんなこと、一度も言つてないし、正直、海憂のこと、年上だからなんて思つてなんかない」

「もう、いいよ・・・もひ、何も言わない・・・」海憂は海へと走つて行つた。

海へ走つていく彼女の手首にはターコイズブルーの青いブレスレットが光っていた。

俺がプレゼントしたやつだ。ちゃんとつけていてくれたんだ・・・。
俺は、小さくなつていく彼女の背中をただ見ていた。今日の海憂はどこかへんだ。

いつたいどうしたんだろう？

そんなに年の差つて関係あることか？お互いが信じあつてりやそれでいいんじやねえのか？

俺の頭の中でそんな言葉がクルクルと翻け巡つていた。

わたしは、なんでこんなにイカついてんだろ？
思つ通りに波に乗れないから？雅弥くん達を羨ましそうに見ていた

拓斗の顔を思いだすから？

やつぱり私が5歳も年上だから？

いろいろいろいろ考えていたらなんだか無性に泣きたくなつた。
私は海から出て浜辺でへたりこんでしまつた。

「みゅうひかりやん？みゅうひかりやん？」元気ないじゃないか」聞
き覚えのある声、康さんの声だった。

私は、康さんの優しい顔を見たとたん、涙がドッと溢れ出しへじつ
にもならなくなつた。

「なに、泣いてんだい？」康さんは心配そうに私の顔を見ていた。
私は、今まであつた拓斗とのことを康さんに話した。

「拓斗とこると楽しいんだけど、どこか不安になつて仕方がないの。
・」

そんな思いのたけを康さんに聞いてもらつた。

「康さん、ありがと、康さんに話をしたらなんだか少し安心した、
元気が出たよ」

「うん、いいんだよ、みゅうひかりやん、それでいい。泣きたい時は泣
けばいい、我慢なんかしなくていいんだよ」

「そうだね・・・」

「みゅうひかりやん、俺はたいした恋愛経験もないけれど、でもね、相
手を信じじるってことはとってもとっても大事なことだよ」

「うん、そうだよね・・・」

「そりゃーいろいろ不安な時もある、拓斗はまだ若い。でもみゅう
ちゃんはそれを承知でやつのこと好きになつたんだろ？」「

「うん・・・」

「だつたらやつを言ひてみやつひやんの思つたよつてやつてば
いんじやないのかな?」

「うん、わかった・・・」

「ただ、ひとつと聞ひておへや」

「なに?」

「圭ちゃんのことせびあるんだへー」のままじゅ圭ちゃんにも拓斗
にも悪いんじやなこのか?」

「・・・・・」

「圭ちゃんは寝たきりだし、これから先どうなるかはわからない、
最悪な事態も起につるかもしれない」

「うん」

「お互いが後悔しなこよう今のみゆひやんの本当の気持ちを圭
ちゃんに伝えておへべきではないのかな・・・」

「康さん・・・せうだね、そしそうしないといかなによね・・・」

「あー、たとえ圭ちゃんがその言葉を聞くことが出来なくつてもな
・・・」

「康さん、わかった、ありがとへ、圭に今の私の本当の気持ち伝え
てくれるね・・・」

「せうだね、それがいい、頑張れよー」

「うん、ありがとう

康さんのその言葉を聞いてから、私は圭が入院している病院へ向か
つた。

「ここ最近、私は彼の所へ行つていなかつた。」

「圭のところへ行つて圭にちゃんと謝らなきや・・・。」

横たわったままの彼の横顔をながめていた。

彼の頬に触り、髪に触れ、手を握りながら私は彼に謝った。

「ごめんね、ごめんね圭、あなたのそばにずっと居るよって、約束したのに私はあなたを裏切りました」

「あなたより好きな人が現れるなんて思いもしなかった。ごめんね、ごめん・・・許して・・・」

わたしは瘦せこけてしまった彼の頬に最後のキスをした。

「圭、今までどうもありがとう、本当にありがとう・・・わたしはあなたの恋人で居られたこと、あなたの恋人だったこと 幸せに思っています」「圭・・・ありがとう・・・」

圭の表情が変わることはなかつたけれど、でも、一瞬、彼が笑ってくれたように思えた。

でも、その日が彼とわたしが会つことが出来た最後の日になつた。

「おい、拓斗…」「はい?」おやつさんが叫んだ。

「なんすか?」

「今日はもう店じまいだ

「わうなんすか?」

「こ」、海の家 潮騒では毎年、8月の1~5日には早く店をしまい、仲間うちでバーベキューをするそうだ。

「バーベキューか・・・楽しいわうすね

「早く片付ける!」「はーい!」

それから間もなくして涼平さん、俊さん、康さん、雅弥、美咲ちゃん、おやつさん、女将さん達が集まってきてガヤガヤとバーベキューが始まった。

「かんぱ~い!」「かんぱ~い!」

「おい、肉、肉!」「これまだ焼けてね~」「ピーマンとつてくれ

」

「おい、雅弥、食いすぎだぞ~」「あははは・・・

「ほれ、みんな、野菜も食べなさいよ~!」女将さんの明るい声がする。

「もうこしうまいね~」「おい、ビール、ビール!...!」

みんなでわいわい騒ぎながら食べる肉はかくべつにうまい。

「ビール、いただき~!」「おい、お前はまだ未成年だろ~雅弥!」

「おやつさん、ま~堅い」とは言わないでね~、せつかくなんだから・・・ね!」

「いしあたま~!」「こら~なにいいやがる!」

「つたぐ、お前はいつもわうやつて・・・ばかもの!」「あはは・・・

・

周りの人は大笑いだ。

でも、俺はそこに海憂の姿がないのが少し寂しかった。

「あつーみゅうさんだー！」「みゅうさんー」「みゅうひゃんー！」

みんなが彼女を迎えて行く。

「お~やつと来たか、じつちきな、みゅうひゃん」康さんは俺の隣に海憂を座らせた。

この間、けんか？みたいな感じになつて、それから彼女に会つてになかつたから、俺はなんだか緊張した。

「こんちは~」「お~」

「みゅうちやん、ここしばらくみかけなかつたけど、どうかしたの？」女将さんが彼女に聞いた。

「うん、大丈夫だよ」「や、それならいいけど・・・」「や、飲んで、飲んで」

「はい、いただきま~す！」海憂は、ビールをつまわつに飲んでいくらか機嫌がよさそうに見えた。

いい飲みっぷりだな・・・俺は、彼女の顔を眺めていた。

いろんな話をみんなで語つてたくさん肉を食つて、ビールを飲んで・

・・・気が付いたら陽が傾いていた。

そうだ、俺はここでちゃんとけじめをつけよう。海憂と俺のこと、ちゃんとみんなに報告しよう。

「さて、そろそろ、お開きにしてますか?」「やうだね~」

「あの~みなさんへ報告したいことがあります」

「なんだよ、拓斗あらたまつて・・・」雅弥が言った。

「実は、俺、俺は・・・・・・」

「海憂さんと・・・帆苅海憂さんと付き合つています!!」みんな、ぽかんとした顔で俺のことを見ている。

しばらくの沈黙の後、俊さんが言った。

「そんなのとっくに知つてたよな～」「なあ～？」

「うん、知つてたよ～」「だつてお前わかりやすいんだもん！」

「わつはつはつ！～」みんながいつせいに笑い出した。

「みゆうちゃん、よかつたな～おめでとう～やつとみゆうちゃんの気持ちが通じたね～」

「や、やだ、康さん・・・」海憂は照れくさがつて笑つてそして少し泣いていた。

「たどりつくべきところにたどりついたな・・・みゆうちゃん」

「うん、おやつさん、ありがとね・・・」

「んじゃ、もう一回、乾杯しますか？」「お～いいね～」「拓斗と

みゆうちゃんの恋にかんぱ～い！！！」

俺は、嬉しかった。これで、海憂と堂々と手をつなぎながら海辺も歩ける。そこらへんに買い物にも行ける。

やつと海憂を俺のものに出来たんだ。これからも彼女を大事にしなきやあな・・・大事に幸せにしてやるー

その日の夜、俺は初めて彼女の家まで送つていいくことになつた。
海憂はどんなところに住んでるんだろ？彼女の部屋はどんな感じなんだろう？そんなことを考えながら
海憂のその細い指を自分の手にからませ、そして彼女の手をぎゅっとぎりしめていた。

「拓斗、今日はありがとう、あんまりに突然だつたからびっくりしたよ、でも、嬉しかった、これであなたと私は本当の恋人どおしになつたんだね」海憂が恥ずかしそうにやつ言つた。

俺だつて海憂と本当の恋人どおしになれたこと、すげく嬉しいんだぞ！

そんな言葉を言いかけたけどそれよりも今は、目の前に

いる彼女を、海憂を抱きしめたくてただ抱きしめたくて・・・。

俺はそんな気持ちを抑えられなくなつて、彼女のことを強く抱きしめそしてキスをした。海憂、愛しているよ・・・。

「拓斗、く、くるしによ・・・、でもずっとこのままいりしてて・・・」

それから俺たちは、2人肩を寄せ合い、うでくみなんかしながら海岸沿いをゆつぐつと歩いていた・・・。

海憂はとても嬉しそうに俺の傍らで笑っていた。

「ねー花火しょー。」

「えつ？ 花火？」

「うん、さつき潮騒で買つてきちゃつた！」

「いつのまに・・・」

「あはは、なにそんないびつべつしてんのよー。」

「じゃ、火つけるよ」

「あぶね〜から、俺がつけたるー。」

「拓斗、やさし〜！』

「なにいつてんだ！ ちやかすんじやね〜よー。」 俺は海憂のおでこに
軽くテロップンをした。

「いた〜、なにすんのよーあはは・・・」 海憂の笑顔は最高に綺麗
だ・・・。

俺は、花火に火をつけた。

花火の炎はどこまでも碧く、金色に変わつていいくそのままはどこか
はかなく、薄暗い海岸を照らしていた。

「きれー〜・・・」

「海憂のまうがもつと綺麗だよ・・・」

「今、なんて言ったの？」

「な、なんにも言つてね〜よー。」 俺はそんな言葉を言つた後、みよ
うに照れくさくなつて鼻の頭を搔いていた。

「なんだ、海憂、好きだ〜とでも言つてくれたのかと思つた、うふ
ふ・・・」

「なんだそれ！」

「海憂」「うん？」

「俺から、俺から離れるなよ、いつでも俺の横で笑つてろ・・・」
拓斗が照れくさそうにそう言った。

「うん、でも・・・」「うん?」

「でも、私でいいの? 私なんかでいいの? 私はあなたよりも5つも年上で、こんなおばさ・・・」

「海憂、俺は年の差なんて関係ないと思つていい、俺は今、俺の目の前でこうして笑つている海憂に恋をしたんだ」

私の言葉をさえぎるように拓斗が言った。

「ありがとう・・・そんなにまで私のこと思つてくれて・・・」

「海憂、約束」「約束?」

「うん」「なに?」

「もう、年の差なんて気にするな! 海憂が年上だろ? それでなからりと俺の気持ちは変わらない、だから気にするなよ」

「うん、わかつた、今ままの私をあなたが受け入れてくれたこととても嬉しかった」

「うん・・・」

「そろそろ行こうか・・・」「うん」

海憂の家はそこから少し歩いた小高い丘の上にある。

今、流行のログハウスつてやつでウッドデッキがあつて暖かみのある佇まいの家だ。

玄関の前には海憂のサーフボードが2、3個立てかけてある。その中には、初めてデートをしたあの時に買ったあの青いボードが置いてあった。

そういうえば、あの時、彼女と初めてキスしたんだつたな、初めて彼女の名前を俺が呼んで海憂が泣いてくれたっけ・・・

玄関を通りぬけたあたりからなんだか急にドキドキしてきた・・・。

海憂の部屋に通されてから、俺の鼓動はますます高鳴った、やべえ

「理性をなくしちゃうだ・・・まじ・・・やべえ・・・
彼女の部屋の片隅に置いてあるベッドの上の海を思わせるような青
い色のベッドカバーが俺の気持ちをますますヒートアップさせてい
た。

「今、コーヒーでも入れるね・・・」海憂が部屋から出て行こうと
した時、俺は自分の気持ちが抑えられなくなつた。

部屋から出て行こうとする彼女の腕を取り彼女の体を引き寄せた。

「た、たくと？」

「みゅう・・・」驚いた顔をしている彼女の唇に自分の唇を合わせ
た。

海憂の香りがするその部屋で俺は彼女を抱きしめた。

小麦色の肌はどこか男っぽいけれど意外なほどに華奢な彼女のそ
の体は俺の腕の中にすっぽりおさまっている。

「みゅう、みゅう・・・」「たくと・・・」

「ずっと、ずっと」うしたかった・・・」「たくと・・・

その日の夜、俺たちは初めて1つになつた。

お互いのその肌のぬくもりを感じ合い、確かめ合い、俺たち2人は
いつまでもベッドの中で抱き合つていた。

遠くで波の音が聞こえる・・・

朝陽が差し込むその部屋で俺は目をめた。
まだ頭の中が覚醒していない。

えーと・・・

そうか、ここは海憂の部屋だ。

じょじょに田ざめでいく記憶の中で、昨日のこと、なんで俺が
海憂の部屋にいるのかなんていろいろ思い返していた。

そうだ、^{昨日}昨夜海憂は俺の女になつたんだ・・・俺の海憂になつたん
だ・・・

完全に田ざめた俺は、そのことがやたらと恥ずかしくなり照れくさ
くなつた。

「海憂？ 海憂？」 とりあえず俺は彼女の名前を呼んでみた。 それが
夢ではないんだと確かめたかったから。

隣の部屋で人の気配がする。

目玉焼きが焼ける匂い、トーストの香ばしさ、コーヒーメーカー
がポコポコという音。

俺はベッドの中からノソッと起き上ると、その部屋へと行つてみ
た。

「あ、おはよー。」

「あ、はよ~」

「なんかテンション低いよ~」

「俺つて朝はいつもこんな感じ・・・」

「ふうん、でも、少しテンション低くてトーンダウンした拓斗の声

もい・い・ね・・・なん・て・ね・・・

「な・に・言・つ・て・ん・の・・・」

「あん・まつ、氣持・ちよ・れ・た・ひ・寝・て・た・か・り・そ・の・ま・ま・ま・つ・と・こ・た、へ

へ・へ・・・・・

「チ・コ・リ・一・へ

「ー・?」俺は海憂の唇に軽くキスをした。

「おは・よ・の・キ・ス」「も・づ・、拓斗・つ・て・ば・~」海憂は照れながら笑つて・いた。

「わあ~」ほん・食・べ・よ~・~

「うん、い・だ・き・ま・す

「い・だ・き・ま・す

「つ・ま・い・~」「ほん・と・? な・り・よ・か・つ・た・~」きれいに盛り付けられた朝めしはひとつもつまかつた。

「こ・と・な・ふ・う・に・海・憂・の・作・る・朝・め・し・を・ず・つ・と・食・べ・て・い・け・た・り・い・な・~

俺がなにげなく言つたその言葉をや・れ・あ・れ・ぬ・よ・う・に・「う・れ・し・わ・れ・ま・~

・」と海憂が言つた。

? じ・け・そ・つ・さ・ま な・ん・か・へ・ん・な・感・じ・・・・。俺、な・ん・か・へ・ん・な・こと言・つ・た・か・な・~・?

海憂も、それいいかもね、とか、これからも作つてあげるよ、とかとでも言つてくれるんじゃないかと思つた。

「・・・・・・」

「海憂?」彼女がきゅうに黙り込んでしまつた。

「拓斗・・・・」「うん? どう・し・た?」

「ひょ・っ・と・し・て、昨夜のこ・と・と・か・思・い・出・し・や・つ・た?」俺は冗談めかしにそんなことを言つてみた。

いつもの海憂なら、やだあ~拓斗のすべき~とでも言つ返してくるかと思つたから・・・。

「拓斗・・・」

「うん、なに?」

「・・・・・」

「なんだよー?」

「拓斗、わたしあなたに言つておかなきゃいけないことがある・・・

「なに? そんなにしんみりして、ひじくないね~」

「冗談じゃないからね・・・」

「・・・わかつた」

それからわたしは拓斗に今まで自分がどんなことをしてきたか、どんな恋をしてきたか、どういう気持ちでプロサーファーなんかめざしたか、今の自分の気持ちを洗いざらい彼に話した。もちろん圭という恋人がいたことも、その彼が今もまだ寝たきりの状態でいることも話した。そして彼を裏切ってしまった自分のことも、ちゃんと彼とお別れをしてきたことも全部、全部、拓斗に打ち明けた。

拓斗はだまつて聞いていた。

わたしはそのことで拓斗が自分から離れていってしまうんじゃないかと不安でいっぱいだった。

涙がこぼれた。わたしは拓斗に別れを告げられんじやないかと覚悟を決めていた。

しばらくの沈黙のあと、涙でいっぱいのわたしの頬をぬぐいながら拓斗が言った。

「海憂、全部話してくれてありがと、なんて言つていいかわからぬいけど・・・」

「うん・・・」

「海憂、俺は海憂の過去とか海憂の元彼のこととかって今の俺には正直、関係ないと思つている

だって海憂は今の俺を好きでいてくれてんだろう？それと同じに俺は今
の海憂を好きになつた、俺とここで一緒に生きている今
海憂が好きだから。で、なによりもどんなことよりも俺は海憂のこ
とが大事だと思つてゐるから・・・

「拓斗？ほんと？本当に？」

「うん」

「こんなわたしでもいいの？あなたと一緒に生きてつていいの？こ
んなわたしでも大事に思つてくれてるの？」

「あたりまえだろ、海憂は俺の一番大事な女だよ・・・一番大切に
したい女だ」

「拓斗・・・ありがとう・・・」「海憂がまた泣き顔になつた。

「海憂・・・もう泣くな・・・」俺たちはふたたび抱き合つた。

その日、海憂の部屋から眺めた朝焼けの空はとっても綺麗だつた。

そんな空を見ながら俺はこの女を海憂をなおりつそう幸せにしたい
と思つていた。

彼女のその肌の温もりを感じながら・・・。

海憂の部屋で過ごした日か

一日が過ぎた。

海憂は相変わらず波乗りの練習をしている。

この8月20日にはプロテストがあるからだ。

「よ～し、今日の波は最高だよ～なんかいい感じ～」

海憂がそう言いながら砂浜へと上がってきた。

なんだかすこぶる楽しそうだ。俺はそんな彼女の顔をじっと眺めていた。

「あれ～拓斗、なんかへんだね～どうかしたの？わかった、Hなことでも考えてたんでしょう？ははは・・・」

彼女がケラケラと笑う。

「そんなんじゃ～ね～よ～、そんなんじゃない・・・」

「じゃ、どうしたの？」

俺は、海憂がプロテストを受ける日の日に東京に帰らなければいけなかつた。

本当はこのまま、ずっとずっと海憂のそばに居たい。居てやりたい。でも、現実はそうもいかない。

俺は、このことをじつじつと海憂に告げればいいのか考えていた。

「あ～気持ちよかつた、この調子ならプロテスト合格出来るかな？
ね～そしたら、拓斗、お祝いしてくれる？」

「海憂・・・」

「なに～どんなお祝いしてくれるの？」

「海憂」「うん？なあ～に？」

「その日、8月20日の日は、俺、お前のそばにいてやれない・・・

「えつ？」

「その日、俺は東京に帰らなければいけないんだ……ごめん……」

「海憂の顔から笑顔が消えていった。」

「そりなんだ……」「ごめんな……」

そして海憂は無理やり笑顔を作つて「しかたないよ……拓斗は東京人なんだもん、しかたない……」

「んじゃ、その日が来るまで楽しく笑つて過ごそ！二人でさ……じや、もう一回、行つて来るね……」

彼女は、バタバタと走つて海の中へと入つて行つた。彼女の背中は泣いていた。俺だつて泣きたい気持ちだ。

しばらくしてから海憂がまた俺のところへと戻つてきた。

「ね……」「うん？」「しばらくじつしてて……」「あ～……」

海憂は俺の肩にもたれかかり、俺の手を握りしめながらただ黙つて隣に座つていた。その時、彼女の肩は震えていた……。

「海憂、携帯貸して」

「えつ？」

「俺たちこんなにそばにいるのに、お互いの携帯番号すら聞いてなかつた、番号の交換すればいつでも声が聞けるだろ？」

「うん、そうだね、携帯つていつ手があつたか」「海憂の顔にようやつと笑顔が戻つた。

それから俺たち二人は、俺が東京に帰るその日まで、暇を見つければデートを重ね、お互いの家を行き来し
夜の海边に遊びに行つたり、もちろん愛をたしかめあつたり、2人の時間も2人の思い出もたくさんたくさん作つていった。

あなたの唇が触れたマグカップも、あなたがわたしを抱きしめたその腕も、わたしを好きだと黙ってくれたその声も全部、全部、いい思い出になるんだね・・・

そんな風に彼と過ごす一つ一つがわたしには愛おしくてならなかつた。

「ね？ 明日は何時にここを離れるの？」

「たぶん、夕方になるとと思う」

「そう、じゃ、テストが終わったら真っ先に飛んでいくよ、拓斗の照れた顔が見てみたいから・・・」

「なんだ、それ・・・」

「じゃあ～もし海憂が俺が帰る時間に間に合つたら思いつきりキスしまつくてやる～」

「やだ～なに言つてんの～拓斗、すけべ」

そして俺たちはここ石吹島での最後の夜を2人で迎えていた。その夜俺は、海憂との思い出を絶対消さないように自分で心に刻み込むように彼女のことを思いつきり愛した。

その日の朝、俺は海憂の部屋で用意した。そこにはもう海憂の姿はなかった。

キッキンへ行つてみると朝めしが用意してあった。そのままそばに置き手紙が置いてある。

* 拓斗へ

あんまり気持ちよさがつに寝てるからわたしまのままテストに行つてきます。

絶対絶対、合格してみせるね・・・。そして、あなたのこと見送りにいくね・・・

あなたがくれたプレスレットしつかり付けていっただよ。これを拓斗だと思って頑張ってきます。

- 海憂 - *

P · S · I · L O V E · Y

O

海憂頑張れよ・・・

俺は海憂の部屋をあとにし、海の家 潮騒へとむかって行った。今日が俺がここで働く最後の日だ。

「おはよーっすー。」「お~おはよー。」「はよー。」

「いよいよ、今日という日が来ちまつたな・・・」雅弥が寂しそうにつぶやいた。

雅弥の彼女、美咲ちゃんは一足先に東京に帰ったといつ。そか、美咲ちゃんは東京人とうきょうじんだつたけな・・・。

俺はそのことがすごく羨ましくてならなかつた。俺だつて、俺だつて海憂をこのまま連れ帰りたい・・・。

「お~い、みんな、集まってくれ~!!」おやつさんが言つ。

そこには、飲み物やら、やきいかやら、やきそばやら、海の家 潮騒の名物?がところせましとおかれていた。

「さあ~て、みんな 集まつたか~?」

「お~い、拓斗、雅弥、今日まで」じ苦労さんだつたな、気持ちばかりのお別れ会をやるぞ!」

「まじっすか?」雅弥が驚いた口調で言つた。

「かんぱ~い!かんぱ~い!」

「2人とも東京に帰つても」この」と、こで知り合つた人たちのこと忘れるなよ!」

「は、はい!絶対に忘れません」

「ほんとか?雅弥?」「わはは・・・」みんながいつせいに笑い出した。

「拓斗、おい、拓斗!」康さんが血相を変えてやつて來た。

「あ~康さん、どうしたんすか?そんなにあわてて・・・」

「みゆうちゃん、テスト会場に来てないんだつて!」

「えつ?だつて、今朝、置き手紙置いてありましたよ、テストに行つて来るねつて・・・」

トウルルル・・・トウルルル・・・

突然、康さんの携帯が鳴つた。

「みゆう、みゆうちゃんかい?なにしてるんだよ?テストはどうし

たんだ？」

あわてる康さんの声が聞こえる。

「えっ？ なんだって、死んだ？」

えっ？ 死んだってなにが？ 誰が？ 僕は海憂の身になにかおきたんじやないかと心配でならなかつた。

「拓斗……」

「康さん、いつたい何があつたんです？ 海憂になにがあつたんです？」

「いや、みゅうちやんじやない……圭ちゃん、圭ちゃんが今しがた亡くなつたそうだ……」

圭ちゃん？ それは海憂の元彼、津本圭さんが亡くなつたという知らせだつた。

「康さん、海憂は海憂は大丈夫なんですか？」

「みゅうちやんは、泣いていたよ、電話口で泣いていた……」そ

うこゝう康さんも顔中涙でクシャクシャになつていた。

「俺、海憂のどこに行つてきます」「俺が走り出そうとした時、康さんが俺を止めた。

「拓斗、今はそつとしといてやつてくれ……彼女のためにも頼む……」

俺は、しんみりしてしまつたその場にただ立ち尽くしていた。

それでも時間は待つていてはくれなかつた。

「じゃな、拓斗、雅弥、元氣でな！ また遊びに来いよー」潮騒の仲間達が手を振つてゐる。

そこに海憂の姿はなかつた。海憂の携帯も繋がらないままだつた。

そんな中でも、容赦なく東京へ帰る時間は近づいていた。俺と雅弥はただ無言のままでいた。

「じゃ、俺はここで……」雅弥が言った。

「拓斗、なんて言つていいかわからないけどみゆいつたことまで会えるって……」

雅弥はそれだけを告げて電車から降りていった。

「プルルル……プルルル……俺の携帯がふいになつた。」

着信 海憂 海憂からの電話だつた。

「もしもし、海憂、海憂、大丈夫か？ 海憂！」

「た・く・と・・・・」

「海憂・・・」

「拓斗、今日、送りにいけなくつてごめんね、キスしてあげられなくてごめんね」

「なに言つてんだよ！」

「俺の方こそ、海憂がつらい時、そばに居てやれなくつてごめん、支えてあげられなくてごめん」

「たくとー」彼女が電話の向こうで泣き崩れていいくのがわかつた。

「海憂、いいか、海憂、俺たちはどんなに離れててもいつも一緒に、お前が生きている限り俺たちは一緒になんだぞ、わかつたか？」

「うん、うん・・・・わかつた」

「つらい時はいつでも電話して來い、俺がそつちこにける時には必ずお前に会いに行くから・・・」

「うん、わかつた、ありがとう、拓斗 愛してる・・・」

「俺も愛している・・・」

夏が終わりを告げる頃、1通の手紙が俺の元へと届いた。

* 拓斗へ

拓斗、元氣ですか？
わたしは元氣です。

この夏のあなたとの思い出をしつかり心に刻んで一日一日を大切

に生きてこます。

康さんやねやつさんたちに囲まれて時には励まされて支えられて一生懸命頑張っています。

たまに東京の方を眺めてはため息がでるやうな感じです。

本当はあなたの元へと飛んでいきたい・・・・。

話したいことは山ほどあるけれど今日はないでやめときます。

あなたに会いたくなってしまつから・・・・。

じゃ、元氣でね・・・。

-帆丸海憂ー*

海憂 会いてえなあ～
海憂 ずっとずっと恋してこぬよ・・・

海憂から手紙が届いてから

俺は俺なりにいろいろと頑張っていた。

単位が足りない学科や生活態度、今までの俺とは「別人になつたね・

・・「なんて愛実や雅弥に冷やかせられながら・・・。

その時の俺は俳優という道を選ぼうと真剣に考えていた。

少しでも大人になつて少しでも男になつて早く海憂をこゝへ連れて
来たい。

この東京で海憂と一緒に暮らしたい。そんな気持ちがなあいつそう
俺をせき立てた。

頑張らなければ・・・。

そんな気持ちが固まつた頃、俺は海憂に手紙を出した。

* 海憂へ

元気でやつてますか？

俺は早く一人前の男になつて海憂を迎えて行きたいと思つています。

でも、気持ちばかりが先走つて空回りしてる俺がいます。

情けないな・・・今、君はそんなこと思つて笑つているかな？

ただ、今ままの俺では君を守ることも君を幸せにすることもできなになつて思つています。

まだ、自信がありません。だから、3年待つていてください。

3年たつたその時には俺は必ず君を、海憂を迎えて行くから・・・

。これはほじな話だよ、海憂。

3年後に君を初めて海憂と呼べた、あの海で僕は待つています。

海憂も待つていてください。

その手紙を出してからしばらくして、俺は高校を卒業し、高校時代からやつていたモデルの仕事をこなしながら俳優養成学校やら音楽教室やらに通い、無我夢中で一日もやつてきた。ただ、彼女を海憂をしてやりたい、そんな気持ちでここまで頑張ってきた。そして、あつとこつ間に3年が経つていた。

俺はふたたび石吹の海に立っていた。

ここは海憂と初めてキスした場所だ。あの時、海憂が、「わたしの名前初めて呼んでくれたね」って泣いてくれた場所だ。

海憂との待ち合わせの時間が一刻と過ぎていく。俺は煙草をくわえた。「ふー」煙草の煙を吐き出した後、顔をあげた俺に飛び込んできたその顔・・・海憂だ・・・俺は煙草をあわててもみ消し彼女が走つてくる方向へと走り出していた。

「海憂・・・！ 海憂・・・！」

「拓斗・・・！」彼女が俺の胸へと飛び込んできた・・・

「拓斗、拓斗、本当に迎えに来てくれたんだね、拓斗、会いたかった〜〜」

「海憂、待つてくれたんだね、やつとお前を迎えてくれた・・・

「海憂、会いたかった・・・」

俺はその言葉だけ告げたあと、海憂をきつく抱きしめた。

「もう、離さないよ、海憂のことぜつたいに離さない・・・」彼女はただだまつてうなずいた。

しばらく、海辺を2人で歩いたあと、海憂の家へ行った。そこは3年前、海憂を初めて抱いたその時となんら変わりはなかつた。

俺は海憂をきつく抱きしめそして彼女を抱いた。海憂は嬉しそうに俺の腕の中で笑つていた。

「なあ、海憂」「うん？」

「俺と一緒に東京へ行かないか・・・」「えっ？」

「俺と一緒に東京で暮らさないか？」

「いいの？本当にいいの？」

「あ～、俺は海憂とずっと一緒にいたい・・・」

「ありがとう・・・拓斗、ありがとう・・・」そう言つたあと

「拓斗、煙草の香りがする・・・大人になつたんだね・・・」海憂がニコッと笑つてみせた。

海憂の腕には俺が彼女と初めてデートをしたとき、俺がプレゼントしたター コイズブルーの綺麗なブレスレットがキラキラと輝いていた。

俺が21歳 海憂が26歳の夏だつた。

波音をかき消す通り

転がり込むよひに

雨 息を切らして

クルマの中へ

遠くに霞んでる人影
ふたりただ毛布に

くるまつていた もう寒くないね
も 見えなくなつて

も 雨

久しぶりの海はいつ

『誰のせいだろ』つ

てキミが笑つ

そ募らせてくれ この瞬間を

せつなさひとつも愛し

どんな言葉より強く

伝わるよひに そう抱きしめて

たぎれる雲間から波

間へと 差し込む光り

#^田でいかで見た 絵

画の世界 そう祈るような

なにげないくだらな

い冗談

『笑えないよねえ』つ
てキミが笑う

やつと出合った運命

に感謝しよう 心を込めて
どんな想いより強く

焼きつけたい 大切に

る羽 ディケやくのだろう

海鳥の群れ 風を切

明日へと 未来へと

ボクらは羽ばたける

せつなをよつも愛し

れ暮らせてく ここの瞬間を

どんな言葉より強く

伝わるよつて 抱きしめて

感謝しよう 心を込めて

君と出合えた運命に

どんな想いより強く

焼きつけたい いつまでも

Forever, p
precious one

And ever

gracious time

You're n

ot the only lonesome one

Forever, p

precious one

And ever

gracious time

ot
the
only
lonely
loner
one
You,
re,
n

ot
the
only
lonely
loner
one
You,
re,
n

ot
the
only
lonely
loner
one
You,
re,
n

(shiosai)

Simap^{エスマップ}
SSMAP

—海憂第2章—

登場人物

古坂拓斗

21歳

俳優をめざして日々がんばっているがなかなか

か芽がないでいる

帆苅海憂

26歳

拓斗の恋人 拓斗のことを陰日向になり支え

ている

成瀬愛実

21歳

拓斗の幼なじみ

斎藤雅弥

21歳

拓斗の同級生 高3の時知り合った美咲と婚約中

山本美咲

21歳

雅弥の婚約者

関耕作・聰美（せきこうづやく、れいみ） 拓斗が高3の時バイトをしていた海の家 潮騒のオーナー

前本康

30歳

海憂のよき相談者 海の家 潮騒のスタッ

ツフで6歳の男の子のよきパパで海の男

八坂充

38歳

拓斗をモデルとしてスカウトした人物

山根誠

34歳

拓斗のマネージャー 仕事に厳しい反面 拓

斗の兄貴のような存在 俊敏マネージャーという噂も

石本麻衣

23歳

女優 拓斗の恋人と噂されている

「うさぶ〜」

「ほんと寒〜い、ここってばでっかい建物ばっかで、ビル風つてのがとつても寒いんだもん！」

俺が去年の夏、海憂をあの海に迎えにいつてから半年が過ぎた。

「俺と一緒に東京へ行かないか・・・」
「俺と一緒に東京で暮らさないか？」

「いいの？本当にいいの？」

「あ～、俺は海憂とずっと一緒にいたい……」

「拓斗、ありがとう……」

俺が21歳 海憂が26歳の夏、俺は彼女にそう言った。
それからほどなくして海憂はここ東京の街へ出てきた。

「石吹はこの時期でもこんなに寒くないもんなあ～」

「そうだね、あつちはもう少し暖かいかも……」

「海憂？後悔してるか？」

「えつ？なにを？」

「俺とこんな都会のど真ん中で暮らして、お前にひとつでは窮屈なん
じやないかと思つてさ……」

「う～ん、そんなことは思つてないよ、だつてわたし自身が決めた
ことだもん、それよりあなたとここで暮らしていくことが
今はとっても嬉しい……」

「そか……」

「お前はコテコテの海女だから、海が恋人みたいなもんだったから
な」

「うん、たしかにコテコテの海女うみおんなだったかも……」

「？」

「でも、その海に飲み込まれて浮かんでこれなかつた人」海憂はそ
う言つて自分の指で自分のことをせして笑つていた。

そう、海憂はプロサーファーを目指して頑張っていた女だった。
プロサーファーのテスト当日、彼女の元彼が亡くなり、それをきっかけに彼女はプロの道へは進まないことを決め、
それから3年後、ここ東京まで出てきたのだった。

「は～やつと着いたね～」

俺は海憂が上京してきたことをきっかけに彼女と一緒に暮らしが始めた。

俺と彼女が暮らすアパートはけっして贅沢な感じのところではなかつたけれど、2人で暮らしていくにはさほどふじゅうでもなく2人で一緒にいられるそんな空間がある、そんな佇まいの家だった。

俺は俳優なんかを目指していたけれど、なかなか芽がせず、毎日、毎々と過ごす日々が続いていた。

そんな時でも海憂は

「拓斗はぜつたいいい俳優さんになる！わたしが保証する！」なんていいながら俺を支えてくれていた。

俺にはたいした稼ぎもなかつたからその分、海憂が働いていた。

「拓斗、ごはんだよ～！」

「うん」

彼女は自分がどんなに忙しくてもどんなに疲れていても、いつも笑顔でうまいめしを作ってくれた。

彼女のその笑顔、しんそこと大切にしなきやな、早く彼女を楽させてやらなきゃな・・・

「拓斗？なに考えてる？」俺が寝ているその横で海憂が聞いた。
「海憂の幸せ考えてた・・・」

「うそ・・・」

「うそなもんか、海憂をもっともつと幸せにする方法考えてた・・・

「ば～か！」

俺たちはたとえ苦しい生活の中でも互いを必要とし互いを求めるお互いの幸せを考えあつていた。

このまま、こんな穏やかな暮らしが続していくもんだとそう思つていた。

「海憂・・・」

「うん?」

「愛しているよ・・・」

「うん・・・」

降り出した雨の音を聞きながら俺は海憂を抱いた。

彼女が壊れてしまつんじゃないかと思つてから激しく彼女を抱いていた。

そうすることで俺自身が強くなれるんじゃないかとそんなことを思つていた。

page 17 - 風の前 - (前書き)

- 海憂 第2章 -

俺が22歳になつた頃、少しばかりの役が付くようになつていた。ほんのちょい役でしかなかつたけど・・・

俺が高校生だつた頃、俺をモデルとしてスカウトしてくれた八坂さんのつてで俺は@芸能事務所の一員になつていた。その事務所の山根誠さんと知り合い、その人のコネもあつて役が付いた。

俺はどこか腑に落ちなかつたけど、このままなにもしないでこの俳優の世界で生きていくことは正直無理なことなんだろう・・・。そう無理やり自分を納得させてちょい役でも出させてもらおうと決心したんだ。

いつでもどこでも俺の中には海憂のことがあつて、なんとしてでも彼女を幸せにしてやりたくて彼女を安心させたくて無我夢中で頑張つっていた。

「拓斗！」

「はい」山根さんに呼び止められた。

彼は俺がここ@芸能事務所に入つてからなにかとサポートしてくれている兄貴的な存在の人だ。

「今日はお前の演技よかつたぞ！」

「けつこういい目になつてきたな、役者てのはどんな小さな役でも目で演技ができなきやだめだ、その目、1つで怒りや悲しみや喜びなんかをうまく表現できないと、大きくなれ

なこ

「は～・・・」

「最近のお前、なかなかいい田になってきたな、その調子で頑張つてくれよー。」

「はこー・あっがとつじゅこまか」「やつた、やつと讐めてせひえた・・・。

俺はやたらと嬉しくなつた。

「お疲れさまですー!」

「お～お疲れ～～～!」

俺は海憂に、今日、山根さんと讐められた事をこす早く報告してくれて、海憂の待つ家までの道のりを走っていた。

「海憂、ただいまー!」

「拓斗、お帰り～～～したの? そんなに遅すぎませへ・・・・・・」
「海憂、俺、今日、初めて山根さんに讐められた、田の演技がよくなつてきました!」

「ほんと? よかつたじゃなこー・おめでとつー。」

「海憂、海憂のおかげだよ・・・・・」

「そんなことはないみ、拓斗が一生懸命頑張ってるから、その結果が出てきたんだよ」

「海憂・・・・」

「な、な、拓斗?」

「ありがとつ、愛してゐる・・・・・」

「なこ、言つてんの、もつ・・・・・」

「な? 海憂・・・・・」

「なに?」

「こつして役者なんかやつてる俺と今、お前の田の前にいる俺って、

どつか違うのかな?」

「こんなくだらない俺の質問に

「なに、ばかなこと言つてゐるの、エマリともあなたでしょ・・・
と言つて海憂が笑つた。

彼女は俺のことなのにそれを自分のことのように喜んでくれた、絶対、絶対、彼女のこと大事にしよう、今、以上に大事にしよう・・・彼女のこと必ず幸せにしてやるんだ・・・俺はあらためて決心した。

「海憂・・・」

俺たちは体を重ねてお互いの気持ちを確かめ合つていた。

これからとも、2人のあいだにいろんなことが巻き起つていくなんてこと、これっぽっちも想像せずに・・・

—海憂第2章—

俺が23歳になつた年、いろんな出来事があつた。でも、どんなに辛くても苦しきつてもいつも俺のそばには海憂がいてくれた。

ずっとずっと俺のことを教えてくれた。

そんな海憂に俺は思いつきり甘えていたんだ。彼女の寂しさや辛さなんかなんにも考えずに・・・自分のことばかり押し通してきた。

「やつてらるねーよー！」

「なに言つてんだ、拓斗！俳優の道つてのはそんなに甘いもんじやない！」

「つるせーよー。」

「なんだと!!!!」この頃の俺は少しばかり名が売れてきたからって相当、高飛車になつていたんだと想つ。ここまでマネージャーをやつてきてくれた山根さんにもたて突いていた。

「な、拓斗この道はな、ある程度の我慢も媚も嫌だと想つことさえ耐えてやつしていくしかないんだよ、お前、この前もプロトコーサーに文句付けたつていうじゃないか」

「だつて、どうしても納得できなかつたんでー。」

「なに生意気な事言つてやがるー。」

去年の暮れにたまたま出させてもらえた単発ドラマで、俺は主人公を演じた。

その時の演技が高く評価され、来年の春からの連ドラで主演をまかせてもらえたといつまで辿り着いていた。

そのドラマは青春物のドラマだったけど俺のキャラにはあまりあってまるよくな役ではなかつた。

「もひ、いい、今日は帰れー! うちへ帰つてよく頭を冷やして来いー!」「あ～帰ります!」

俺は頭をカツカさせながら家へといそいだ。

海憂がいるから、彼女になぐさめてもらいたかつたから・・・

「ただいまー・・・海憂?・・・居ないのか?」

いつもそこで待つてくれる海憂がいない。あいつ、ビにいつたんだ?

その日、海憂は仕事が忙しかつたらしく、なかなか帰つてこなかつた。

だんだん、俺はイラついてきた。

「ただいまー

「あれー? 拓斗、もう帰つてたの? 仕事は?」

俺は彼女の声を聞く間もなく彼女をなかば強引に抱いた。

「拓斗、拓斗、ちょっとどうじしたの?..」
「・・・・・」
「ね、拓斗つてば、ちょっとちょっと・・・」

彼女は次第に抵抗しなくなり俺のなすがままになつていた。
俺は彼女にそうすることで自分の苛立ちや仕事に対する嫌なことをすべて打ち消そうとしたんだ。

ひどいやつだな・・・俺つてやつは・・・

でも、海憂はけつしてそんな俺をせめようとしなかつた。

「ね？」「したの？ なにかあったの？」

「なんでもない・・・」

「そんなことないでしょ？」

俺は山根さんに言われたことすべてを彼女に話した。

「そう、そんなことがあったの・・・」

「でも、拓斗、あえて言つけど・・・」

「山根さんのいう事も正しこと想つけど、そりやあ、あなたの演技に対する思いつこく強く強いと思つけど

譲れない部分つてのもわかるけど、もつともつと、違う世界？つへん、なんて言つていいんだろ？演技の幅つてこいつの？

それが今以上に広げていけたら、あなたはもつともつとこい役者さんになると想つけどな・・・」

海憂のその言葉を聞いて俺は励まされていった。

「海憂・・・」

「うん？」

「さつあは、」めぐ、悪かった、俺、どうかしてた、「めぐ、」めんな・・・」

「うん、いこよ、そーじほんでも食べよつかー、今日は拓斗の大好物のオムライス海憂スペシャルを作るからね」

「まじで？・・・やつたね！」

海憂はさつ言つてキッチンへと入つて行つた。

彼女の背中を眺めながら

俺はどこまで海憂に甘えているんだ・・・。

もう少ししつかりしるー！

さつよつもなく甘つたれな俺に俺はつぶやいていた。

-海憂第2章-

海憂の優しい励ましや言葉に支えられて俺は春の連ドラの撮影を続けていた。

当然、家に帰るのは遅くなり、家にはただ寝に帰るだけのそんな生活が続いていた。

そんな中でも海憂は俺のために夜遅くまで起きていてくれたり、温かいめしもきちんと用意してしてくれた。

「は～い、ここでクラシックアップで～す！古坂さん、お疲れ様でした～」

「パチパチパチ～～～」大勢のスタッフの拍手が沸いた。

「お疲れ様で～す！」俺は一つの作品を作り上げたことに満足していた。

「よくやつたな！拓斗！」

「はい、ありがとうございました」

「いい演技だつたぞ！」山根さんも喜んでくれていた。

「だが、これからだぞ、ドラマつていつもはやめうなしでも視聴率つてのが関わってくるからな」

「はい、わかっています」

「うん」

「じゃ、これで、俺、あがります！」そう言って俺が帰らうとした時

「拓斗！」

「はい？」

「ちょっと紹介したい人がいるんだ」そう言って山根さんが手を差し伸べたその先に石本麻衣と言つ女優さんが立っていた。

噂では聞いてはいたが、こんなところで会えるとは思っていなかつた。すごく美人で、かといってきどつているような人ではなくどこかさっぱりと男っぽい感じの人だつた。

まさか、この人が俺と海憂との間に波風を立てていく人とは、考えてもいなかつた。

「古坂拓斗君？」

「は、はい・・・俺は田茶苦茶に緊張していた。

「石本麻衣といいます。よろしくね・・・」

「はい、こちらこそ・・・」

「ね、お茶でも飲んでかない？」

「は～でも・・・」

「拓斗、せつかくのお誘いだ、行つてきたらどうだ」ためらつている俺に山根さんが言つた。

「は、はい、じゃ、お言葉に甘えて・・・」

小さな裏切り行為だつた。

その日は撮影が終わつたら真っ先に家に帰つて海憂とプチ打ち上げなんてするつもりでいたから。

拓斗、遅いなー、今日は撮影、終わつたらまつすぐ帰つてくれるつていつたのに・・・
せつから張り切つて作つた「ひめうがさめひやうじやん・・・

（）

携帯がなつた 着信 たくと

「拓斗? どうしたの? ついぶん遅いじゃない」

「「めん、ちょっと撮影延びちゃつて、帰るの遅くなりそうなんだ・

・・“めんな！”ガチャ！

海憂に初めて嘘をついちゃつたな・・・俺は少しばかりの罪悪感を感じていた。

「 - - - - 」切れた・・・珍しく、あわててたな、拓斗・・・
しようがない、1人で食べるとするか・・・

「 いただきま～す 」

「 ・ ・ ・ ・ 」

こんなにたくさんのがちやう、いつたい誰のために腕振るつて作つたんだろう？

まさか、自分1人で食べることになるとは思わなかつた。

テーブルの上に並べられたたくさんの料理を1人で食べるなんて・・

・
わたしは拓斗が、一人前の俳優さんになるまでいろいろなことを我慢してきた。

彼のために彼と幸せになるために一生懸命ここまでやつてきた。

わたしつてば彼のいつたいなんだつたんだろう？

目の前におかれただくさんの料理を眺めながら、今までの2人のこと考えてみた。

ずっと我慢してきたすべてのものが大粒の涙となつてわたしの頬を濡らしていた。

その日、わたしは今までの気持ちを吐き出すように思いつきり声をあげて思いつきり泣き叫んでいた。

なんで、こんな風にその時、思ったのか、なんでこんな風に泣いているのか自分でもわからなくなつっていた。

—海憂第2章—

その年、放映された俺のドラマはなぜか評判になりその事をきっかけに俺はスターダムへとのし上がつて行つた。

今年、一押の若手俳優 古坂拓斗（24歳）

なんてマスコミに騒ぎ立てられ俺は一人有頂天になつていた。雑誌の取材やら、インタビューやら、写真撮りやらが続き、その時の俺には一日24時間なんて足りないくらいの忙しさだった。当然のことのように俺は海憂の待つ部屋にはほとんど帰ることがなくなつていた。

帰るのではなく帰れない状態だつた。

あの部屋で一人待つ海憂はいつたいどんな思いでいたんだろう？…きっと心細くて寂しかつたに違いない。

でも、俺には次から次へと仕事が入つてなかなか彼女のことを考える暇がなくなつてしまつていた。

携帯をかけようと思つてもそばには山根さんや大勢のスタッフがいる。

分刻みのスケジュールの中、少しだけ時間が空いた。

「もしもし、海憂？」

「拓斗？こんな時間にどうしたの？」

「うん、ちょっとだけ時間が空いたから」

「そう・・・」

「拓斗、今ね、あなたのドラマ見ていたよ、田での演技がとってもよくて、こっちまでせつなくなつた」

「まじ？」

「うん、俺は海憂に誓められたなんだから嬉しくなつてこの仕事を

「ここまで続けてきてよかつたな、なんて思つたりした。

「ね、拓斗？」

「うん?」

「もう何日あなたと顔合わせてないんだ?」

「なんだか、もう、わたし疲れちゃつたな・・・」「いつも強気な海憂が珍しく弱音を吐いた。

「なに、言つてんだ、もう少し落ち着いたら必ず海憂のところに帰るから・・・」

「うん・・・わかった・・・」

「古坂く〜ん、もうすぐ次の撮り時間!」

「はい、わかりました!じゃ海憂また電話する」ガチャヤ!「 - - - - -

「 - - - - -

拓斗はわたしをどんどん置き去りにして、手の届かなこといろいろに行ちやつたのかな?

もう、ここには帰つて来てはくれないのかな?

もう、昔のように2人で抱き合つてじょんを食べることもなくなつてしまふのかな?

わたしは、一人、孤独と不安の中で泣き出しちゃつた。こりー泣

き虫!海憂!いつからそんなに弱くなつちゃつたの?
もう1人のわたしが怒つているように聞こえた。

わたしは、もうすぐ29歳になる。世間的にいえば結婚適齢期だ。
そんな気持ちがますますわたしを孤独にさせていった。

海憂が寂しい思いをしていることなんて知らずに俺は仕事にかこつけ、女優石本麻衣とあししげに会つていた。

彼女は俺より2つ年上の26歳、いまやおしもおされる若手の大女優さんだ。

彼女が俺に氣があるのはうすうす感づいてはいたけれど、あえてそ

れを否定する理由などなく

ただ暇な時にお茶を飲みにいつたり 居酒屋に酒を飲みにいつたり、友達みたいな関係が続けていた。

何度も会っているうちに彼女からお誘い?のようなこともあつたけど、俺は最終的に彼女に気を許してはいなかつた。

俺の中にはいつもいつだつて海憂のことがあつたから。

少しばかり名が売れて、安定した収入が入ってきた今、俺は海憂との結婚を考え初めっていた。

—海憂^{みゆう}第2章—

「アーネスト！」

「海憂、今、帰つたぞい！」

「拓斗、おかえり～」俺はひさびさに海憂の待つ家に帰つていた。

「海憂」

一
拓斗！」

なかなか帰ってこれなくてごめんなさい

ナムスヌルが。△△△は指シかいながらヌヌル

海臺に立つモノのうち、元氣に見えるのは、いかにもかんがへり難

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
859
860
861
862
863
864
865
866
867
868
869
869
870
871
872
873
874
875
876
877
878
879
879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
888
889
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
959
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
969
970
971
972
973
974
975
976
977
978
979
979
980
981
982
983
984
985
986
987
988
988
989
989
990
991
992
993
994
995
996
997
998
999
999
1000
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1009
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1019
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
1039
1039
1040
1041
1042
1043
1044
1045
1046
1047
1048
1049
1049
1050
1051
1052
1053
1054
1055
1056
1057
1058
1059
1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065
1066
1067
1068
1069
1069
1070
1071
1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1079
1079
1080
1081
1082
1083
1084
1085
1086
1087
1088
1088
1089
1089
1090
1091
1092
1093
1094
1095
1096
1097
1098
1099
1099
1100
1101
1102
1103
1104
1105
1106
1107
1108
1109
1109
1110
1111
1112
1113
1114
1115
1116
1117
1118
1119
1119
1120
1121
1122
1123
1124
1125
1126
1127
1128
1129
1129
1130
1131
1132
1133
1134
1135
1136
1137
1138
1139
1139
1140
1141
1142
1143
1144
1145
1146
1147
1148
1149
1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1159
1160
1161
1162
1163
1164
1165
1166
1167
1168
1169
1169
1170
1171
1172
1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
1179
1180
1181
1182
1183
1184
1185
1186
1187
1188
1188
1189
1189
1190
1191
1192
1193
1194
1195
1196
1197
1198
1199
1199
1200
1201
1202
1203
1204
1205
1206
1207
1208
1209
1209
1210
1211
1212
1213
1214
1215
1216
1217
1218
1219
1219
1220
1221
1222
1223
1224
1225
1226
1227
1228
1229
1229
1230
1231
1232
1233
1234
1235
1236
1237
1238
1239
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1249
1250
1251
1252
1253
1254
1255
1256
1257
1258
1259
1259
1260
1261
1262
1263
1264
1265
1266
1267
1268
1269
1269
1270
1271
1272
1273
1274
1275
1276
1277
1278
1279
1279
1280
1281
1282
1283
1284
1285
1286
1287
1288
1288
1289
1289
1290
1291
1292
1293
1294
1295
1296
1297
1298
1299
1299
1300
1301
1302
1303
1304
1305
1306
1307
1308
1309
1309
1310
1311
1312
1313
1314
1315
1316
1317
1318
1319
1319
1320
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
1329
1329
1330
1331
1332
1333
1334
1335
1336
1337
1338
1339
1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
1347
1348
1349
1349
1350
1351
1352
1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1359
1360
1361
1362
1363
1364
1365
1366
1367
1368
1369
1369
1370
1371
1372
1373
1374
1375
1376
1377
1378
1379
1379
1380
1381
1382
1383
1384
1385
1386
1387
1388
1388
1389
1389
1390
1391
1392
1393
1394
1395
1396
1397
1398
1399
1399
1400
1401
1402
1403
1404
1405
1406
1407
1408
1409
1409
1410
1411
1412
1413
1414
1415
1416
1417
1418
1419
1419
1420
1421
1422
1423
1424
1425
1426
1427
1428
1429
1429
1430
1431
1432
1433
1434
1435
1436
1437
1438
1439
1439
1440
1441
1442
1443
1444
1445
1446
1447
1448
1449
1449
1450
1451
1452
1453
1454
1455
1456
1457
1458
1459
1459
1460
1461
1462
1463
1464
1465
1466
1467
1468
1469
1469
1470
1471
1472
1473
1474
1475
1476
1477
1478
1479
1479
1480
1481
1482
1483
1484
1485
1486
1487
1488
1488
1489
1489
1490
1491
1492
1493
1494
1495
1496
1497
1498
1499
1499
1500
1501
1502
1503
1504
1505
1506
1507
1508
1509
1509
1510
1511
1512
1513
1514
1515
1516
1517
1518
1519
1519
1520
1521
1522
1523
1524
1525
1526
1527
1528
1529
1529
1530
1531
1532
1533
1534
1535
1536
1537
1538
1539
1539
1540
1541
1542
1543
1544
1545
1546
1547
1548
1549
1549
1550
1551
1552
1553
1554
1555
1556
1557
1558
1559
1559
1560
1561
1562
1563
1564
1565
1566
1567
1568
1569
1569
1570
1571
1572
1573
1574
1575
1576
1577
1578
1579
1579
1580
1581
1582
1583
1584
1585
1586
1587
1588
1588
1589
1589
1590
1591
1592
1593
1594
1595
1596
1597
1598
1599
1599
1600
1601
1602
1603
1604
1605
1606
1607
1608
1609
1609
1610
1611
1612
1613
1614
1615
1616
1617
1618
1619
1619
1620
1621
1622
1623
1624
1625
1626
1627
1628
1629
1629
1630
1631
1632
1633
1634
1635
1636
1637
1638
1639
1639
1640
1641
1642
1643
1644
1645
1646
1647
1648
1649
1649
1650
1651
1652
1653
1654
1655
1656
1657
1658
1659
1659
1660
1661
1662
1663
1664
1665
1666
1667
1668
1669
1669
1670
1671
1672
1673
1674
1675
1676
1677
1678
1679
1679
1680
1681
1682
1683
1684
1685
1686
1687
1688
1688
1689
1689
1690
1691
1692
1693
1694
1695
1696
1697
1698
1699
1699
1700
1701
1702
1703
1704
1705
1706
1707
1708
1709
1709
1710
1711
1712
1713
1714
1715
1716
1717
1718
1719
1719
1720
1721
1722
1723
1724
1725
1726
1727
1728
1729
1729
1730
1731
1732
1733
1734
1735
1736
1737
1738
1739
1739
1740
1741
1742
1743
1744
1745
1746
1747
1748
1749
1749
1750
1751
1752
1753
1754
1755
1756
1757
1758
1759
1759
1760
1761
1762
1763
1764
1765
1766
1767
1768
1769
1769
1770
1771
1772
1773
1774
1775
1776
1777
1778
1779
1779
1780
1781
1782
1783
1784
1785
1786
1787
1788
1788
1789
1789
1790
1791
1792
1793
1794
1795
1796
1797
1798
1799
1799
1800
1801
1802
1803
1804
1805
1806
1807
1808
1809
1809
1810
1811
1812
1813
1814
1815
1816
1817
1818
1819
1819
1820
1821
1822
1823
1824
1825
1826
1827
1828
1829
1829
1830
1831
1832
1833
1834
1835
1836
1837
1838
1839
1839
1840
1841
1842
1843
1844
1845
1846
1847
1848
1849
1849
1850
1851
1852
1853
1854
1855
1856
1857
1858
1859
1859
1860
1861
1862
1863
1864
1865
1866
1867
1868
1869
1869
1870
1871
1872
1873
1874
1875
1876
1877
1878
1879
1879
1880
1881
1882
1883
1884
1885
1886
1887
1888
1888
1889
1889
1890
1891
1892
1893
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1899
1900
1901
1902
1903
1904
1905
1906
1907
1908
1909
1909
1910
1911
1912
1913
1914
1915
1916
1917
1918
1919
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926
1927
1928
1929
1929
1930
1931
1932
1933
1934
1935
1936
1937
1938
1939
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948
1949
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1988
1989
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025
2026
2027
2028
2029
2029
2030
2031
2032
2033
2034
2035
2036
2037
2038
2039
2039
2040
2041
2042
2043
2044
2045
2046
2047
2048
2049
2049
2050
2051
2052
2053
2054
2055
2056
2057
2058
2059
2059
2060
2061
2

「ニシキヤ」の書籍

「あ～サシキュ！」

۱۰۸

俺は海憂のおでこに軽くキスをした。

拓斗が久々に帰ってきたのになんだかわたしはちょっとせつなくな

それは彼の洋服にしみこんだきつい香水の香りを感じたからだ。

売れっ子になればなつていくほど外で女人の人と会う機会なんていく

うらでもあるんだからさぞ

その現実を感じてしまつたわたしは悲しくなつてしまつた。
彼に一語二三は必ずはつぱり虫を感心してしまつた。

彼が俳優の道を目指すとわたしに言つたときから、こんな時がいつ

かくるんじやないかと覚悟は決めていたけれど・・・
わたしは欲が深い人間なんだろうか？彼がわたしの元に帰ってきた
といふのこれ以上なのなにをのぞんでいるんだろう？
わたしは、食事の支度をしながらそんなことを考えていた。

「あ～あち～久々にいい風皿だった」
「さつぱつした？」
「あ～」
「海憂・・・」
「うん？」
「うつむけおいで・・・」
「うそ・・・」
「うそ・・・」

俺は久々に感じる海憂の肌のぬくもりを確かめたくてそのまま、彼女を抱いた。

「うつして彼に抱かれててもどこか物悲しいのはなぜ？
心の隙間を感じてしまうのはなぜ？」

拓斗、あなたはちゃんとわたしを愛してくれてるの？
わたしはあなたをちゃんと見ていられるのかな・・・？

「少し痩せた？」
「え～そうかな？もしかしたら痩せたかもね」
「よけい胸がなくなっちゃったじゃないか・・・」
「よけい、ってなによ？ひどいなあ、拓斗つてばなんのこと風呂の
うつむけおいで・・・」

そんないつもと変わらずに軽口を叩く拓斗を感じて
わたしがさつきまでの不安や孤独は帳消しにしようとした。

でも、そんな日からぼくなくしてその思いを裏切るかのよつた出来事があこつたんだ。

ひざびたに海憂の元へ帰つてからじばらくして
俺のところに映画の出演交渉がきた。

「いい話じゃないか、拓斗」山根さんは喜んでいた。
「でも、俺、こういう役はちょっとできませんよ」
「なに、言ってんだ、いろんな役をこなして、お前はもつともつと
大きくならなきゃ、いけないだろ?」
「・・・・・」

この間、海憂の元へ帰つてから俺は瘦せてしまった海憂を見て、彼女をもう待たせるのはごめんだ、なるべく早く彼女と結婚をしたいとそう思つていた。

今の俺がここにこうしていられるのはすべて彼女、海憂のおかげだから、海憂が居なければ、俺はここまでやつてこれなかつたから。彼女に今まで苦労させた分、今度は俺が彼女を守らなければ、彼女を幸せにしてやらなければいけないと心底思えたから。

ここで映画の話なんかきたらまた1年近く彼女を待たせなければならなくなる。そんなことは絶対嫌だ、ありえない。

俺は映画の話を断ろうとそう決めていた。

「拓斗!」

「はい?」

「お前、なに考えてるんだ、映画の話、断つたそうじゃないか」山根さんは俺をどなりつけた。

「いいか、ドタキャンみたいな事をしてみる、すぐに仕事、ほまれるぞ!」「別にいいです」

「なに、勝手なことを言つていい、お前のマネージャーは俺だ、お前に勝手なことはさせん！」

そう言つて、山根さんは楽屋を出て行った。

その日は、仕事が早く終わった。俺は足早に家に帰った。

「ただいま～！」

「あ～おかえり」

居間のテーブルの上になんだか豪華な白い手紙がポンと置いてあつた。

——古坂拓斗、帆苅海憂 様——

そこにはかわいらしい文字が並んでいた。

差出人をみてみると、——斎藤雅弥、山本美咲——

そう、手紙をよこしたその人物は俺の高校の時の同級生っていうか、悪友の雅弥からの手紙だった。

「雅弥君と、美咲ちゃん、結婚するんだって・・・」

「へ～そうか、もう結婚か～、まさかあの2人が結婚までたどりつくとは思わなかつたなあ～」

「そう？わたしは、初めて2人を見たとき、もしかしたらつて思つたけどな～」

「へ～海憂、すごいね～、お前は予言者か？」

「女の勘よ、女の勘！」

「へ～そうですか～、じゃ、海憂、俺が今、お前に何を言おうとしているかわかる？」

「なに？藪からぼうに・・・」俺は海憂の肩を抱き、彼女の目をみつめ——結婚しよう——と言つつもりだった。

その言葉を海憂に言いかけた時、居間でかかつてていたテレビが急にざわめき始めた。

その内容を見て俺は愕然とした。

スクープ！ 新人俳優 古坂拓斗（24歳）の恋人は石本麻衣（26歳）だった！！

石本麻衣さんと古坂拓斗さん、深夜の密会か？2人がホテルから出てきたところをキャッチ！

確かにこの日は俺もけつこう酒を飲んでいたし、麻衣もかなり酔っていた。

情けない話、俺は記憶がなくなりそうになっていた。
フラフラっと歩いた先にホテルの入り口だけは見えていた。「やべえ・・・」そう思つて歩き出そうとした俺の腕を彼女は引き寄せ俺の唇に自らの唇を重ねてきた。「なにするんですか？」「いいじやない、別に・・・あなたもその気だつたんでしょう？」

「何を言つてるんです・・・俺、帰ります」「ちょっと・・・待ちなさいよ！」

<バチバチ>

・・・一瞬俺の目の前をかなり明るい光が走った。

それから俺はどこをどう歩いたのか、気がついたら自分の家の前にいた。

なにもなつかつた振りをして海憂の元へと帰つていたんだ・・・。最低だよな、俺つてやつは・・・。

俺は海憂の顔を見ていた。海憂は怒りとも悲しみともとれる顔で今すぐにも泣き出しそうだ。

「これってどういうこと？仕事つて言つてこの人と会つてたの？
拓斗、ね、どうなの？」

「海憂、これはまったくの誤解だ、確かに彼女とはお茶を飲んだりお酒を飲みにいつたりはしたけれど……」

「ほんと?でも、信じられない……」

「海憂……俺は彼女を落ち着かせようと想い抱きしめようとした。

でも、「いや、こんなの嫌だよ、拓斗、ぜつたい嫌だ!」

そう言つて彼女は玄関の外へと飛び出して行つた。

俺はあわてて彼女のあとを追つた。

「海憂? 海憂?」家の近くの公園に彼女は一人で立つていた。

「拓斗、なんだかわたしあなたに対してもごく裏切られた気持ちがいっぱい、頭に来て外まで飛び出してはみたけれど、けっきょく、わたしにはあなたのそばにいるほかないんだなって……」

「海憂、ごめんな……俺に隙があつたから、お前に余計な心配させた、ごめん」

「拓斗……あなたのこと信じていい?」

そう聞く海憂の言葉をよそに俺は自分がしてしまつた愚かなことを後悔していた。

「海憂にその気持ちがあるのなら、俺はそれでそれだけでいい……ほんとうごめんな……」

「寒いから、家に帰るつ……な、海憂」

「うん……」

その時の俺にはこの位の言葉しか思い浮かばなかつた。

後でわかつた事だけど、この出来事は石本麻衣が個人的に俺を落としいれようとして仕組んだ罠だった。

彼女はそれからしばらくして引退へと追いやられてしまった。

彼女は、俺に海憂という恋人がいることにうすうす気づいていて

海憂に対するジエラシーが元でこんなことをしでかしたんだと聞いた。

でも最終的には俺だつたんだよな・・・

でもこのことがきっかけで俺と海憂の関係がマスコミに取りやれたされるとまでなってしました。

page 23 - 「別れのー」—(前書き)

—海憂第2章—

海憂と家に帰つた夜、俺は、石本麻衣とのこきわみを包み隠さず海憂に伝えた。

きっかけはどうであれ彼女とキスをしてしまったことも彼女と頻繁に会つていたことも・・・。

それでも海憂はもう一度あなたのこと、信じることに決めたと言つてくれた。

俺はその時思つたんだ・・・海憂には勝てないな・・・この女に真剣にやられたと・・・。

そんな出来事があつてもしばらくは静かな日々が続いていた。

俺はといえば、映画のドタキャン、石本麻衣との噂、俺と海憂との関係は?なんて噂が引き金になつていいくらか人気が落ちていた。でも、俺はあせることがなく、それでもなお、俺を必要としてくれるスタッフや番組プロトコーサーとともにマイペースで仕事をこなしていた。

いつしか海憂も落ち着いて、なんだかゆつたりとした時間を過ごしていだ。

「なんだか、こんな時間の流れ いいね・・・」海憂がポツリと言つた。

俺も早くきりんとしなけりや~な~あんなことがあつた後、海憂に申し訳ないと思つ気持ちがあるがゆえ、あの時に言いかけた
・ 結婚しよう - といつその言葉をなかなか、言い出だせずにいた。

「ね、拓斗?」
「うん?」

「もしも、もしもあなたとわたしの間に子供が出来たら、前、なんてつける？」

「えへ、俺はまだ子供のこととは考へてもいなあ～」

「まさか、出来たのか？海憂？」俺は正直あせつた、こへら多少の仕事があつても子供を養つていくほど稼ぎは今の俺にはない。

「もしも、もしもの話よ・・・・

「そうか・・・・

「わたしはね、もし男の子が出来たらあなたの斗とわたしの海をして海斗^{かいと}つてつけたいの、でね、女の子だつたら夏海^{なつみ}つてつけたいんだ、夏の海で拓斗に出会つたから・・・・単純かな？」

「いいんじゃないの、海憂らじくつて

「ばかにしてるんでしょ？」

「してないつて！」子供か、海憂には照れくさくつて言えなかつたけど、俺も彼女と俺の子供がほしいなつて思つた時があつた。でも、今は・・・もう少し稼いで海憂にはほんとうに楽な暮らしをさせてやりたいとそう想つていたから

そのことはあえて言わいでいた。でも、それつて都合のいい言い訳だったのかもしれない。

そんな出来事から半年位経つた頃、海憂や周りの人たちの助けもあつて減つてしまつた仕事の量もだいぶ増えてきていた。

「拓斗が地道に頑張つた結果だよ・・・よかつたね・・・」海憂はいつもいつだつて俺のことをそやつて励ましてくれていた。

今度こそ海憂に結婚を申し込もう・・・・俺はそや誓つていた。

「おはよ～」^{ハヤシ}おはよ～す

「お～おはよ～

「ぞこま～す～」

「拓斗～」

「はい、山根さん、なんですか?」

「お前、あの彼女とのことはどうなつていいんだ?」

「彼女つて・・・?」

「帆苅海憂さんのことだよ」俺はあまりに唐突に山根さんと海憂の名前を言わされたのでドキリとした。

「俺もうすすは感じてはいた、石本麻衣のことがあつたあたりから気が付いてはいたんだが・・・」

「・・・・・」

「俺は彼女と結婚したいと思つています」

「・・・・・」

山根さんはしばらく黙っていた。そして俺に向づいたんだ。

「拓斗、お前の売りつてなんだか知つてるか?」

「え~まあ~、でもあれつてなんか変すよね・・・」

「なにを言つてる、お前はファンにとっては自分の恋人、拓斗はわたくしだけのものつていうイメージで売つてきたんじゃなかつたか?」「一度仕事をほされて、まわりのスタッフやお前のファンみんなに支えられてまたここまでやつてこれたんじゃないのか?」

「それはそうだと思います・・・」

本当はやうじやない、俺がここまでやつてこれたのはなにをかくそう、海憂のおかげなんだ。
彼女がいつでも俺の陰口になりこんな俺を支えてくれていたんだ。

俺がそう言ひかけようとした時、山根さんが言つた。

「彼女と別れる・・・」とただ一言だけ。

俺の頭の中が真っ白になつていつた。

page 24

-新しい命-(前書き)

—海憂第2章—

なんか、最近、体の調子が悪いな。だるくってだるくってしょうがないや、腹もムカムカしてる感じがするし・・・。近にうちにお医者さんこでもいつてこようかな・・・。

今日、仕事がひさびさに休みだったわたしは、部屋の中を片付けていた。

「う・・・、気持ちわるい・・・、「わたしはトイレにかけこんだ。
「・・・・・もしかして、妊娠?」

そういえば・・・わたしは自分の手帳を調べてみた。

「・・・・・」2週間、遅れてるな・・・でも、まさかね・・・疲れてるのかも知れないな。

でも、病院には行つておいたほうがいいかな?

わたしは、家の用事をさっさとすませて、病院へとむかつていた。

「帆苅さん、帆苅海憂さん~」

「はい」わたしは、診察室で先生が来るのを落ち着かない感じで待つていた。

「お待たせしたわね・・・」年のころなら50代半ば位の女医さんがわたしの前に座つた。

「帆苅さん、おめでとうございます、あなた妊娠してるわよ」

「えつ?」

「吐き気がするのはつわりのせいね、今、ちょうど妊娠11週目、3ヶ月つてここね・・・」

「今、超音波の画像をお見せするわね」先生が1枚の写真を見せた。

「はい、ここがお尻、ここが心臓、で、ここが頭よ」わたしはその

モノクロの写真に見入っていた。

拓斗とわたしの赤ちゃん?信じられない・・・と思つと同時にいよいよしない嬉しさがこみ上げてきて、わたしは泣きそうになつた。
「赤ちゃんは元気なんだけれど、あなた、ちょっと疲れてない?無理しているんじゃないの?」

たしかに、ここにこり仕事が忙しくって疲れはたまつていた。
彼の仕事がもう少し軌道にのるまではと思っていたから少々無理はしていたかも・・・

「お母さんが元気にしてないと赤ちゃんも元気に育たないわよ」「はい、わかりました」「あなた、まだ結婚されてないの?」「はい」きつい一言だった。結婚か・・・
「もし、産んであげることが出来ないならなるべく早く相談にきてくださいね」「はい・・・」「じゃ、お大事にね、後は母子手帳を受付でもらつていってね」「はい」「なるべく静養して体力をつけておくよ」「はい、ありがとうございました」

病院を出てからの帰り道、わたしはただひたすら嬉しく嬉しくて

いつも立ち寄りもしないベビー服屋さんなんかに寄つてみた。
でも、家に一步一歩近づくにつれ不安になつてしまつた。

拓斗は赤ちゃんのこと喜んでくれるだろうか?

産んでもいいよって言つてくれるだろうか、彼になんて言つたらいいんだろう?

女といつものほそこに自分のもう一つの命を宿した時、あたりまえのように母親になる決心をするもんなんだな。

彼がたとえ反対しても、このことでもし、もし彼がわたしから離れていつてしまふようなことがあってもわたしはこの子を絶対に守つてみせる。その時、わたしは強くそう思つていた。

家の前に着いたとき、ビニカで見覚えのある車が止まつていた。

「だれ？」

「帆苅海憂さんですか？」

「はい、帆苅ですが……」

「僕は、古坂拓斗のマネージャーをまかせられております、山根と申します」

彼はそういうて名刺を一枚差し出した。

「あ、いつも拓斗が、いや古坂くんがお世話になつております」

「唐突ですが、今日はあなたに頼みがあつて」「今までやつてしまひました」

ひどく紳士的なその人はどこかきつい顔をしてわたしの顔をじろじろと見ていた。

「こんなところではなんですから、うちまで上がりつてください」わたしの声は少しうわづつていた。

「はい、お茶でもどうぞ……」

「あ、おかまいなく……」

「あの、言いづらいのですが……」山根さんはわたしが出したお茶をゴクリと飲みほした。

それから、彼が言った言葉にわたしは愕然とした。がくぜん

「拓斗と、古坂と別れてもらえませんか……」

「えつ？なんですか？」わたしは予想外の言葉にショックを隠しきれないでいた。でも、なるたけ冷静になろうと思つてお腹の上をそつとさすった。わたしにはこの子がいる、この子がいるんだ。一

生懸命、自分にそう言い聞かせていた。

「古坂は、今ようやつと世間に認められてきた

今の彼には彼女とか、女の影とかそういうものは一切感じさせない時期なんです。一度落ちかけた人気をやつとここまで挽回してきたんですから・・・ここで、またあらたなスキャンダルが出るという事は彼にとってはもう致命的だ。

そんなことになつたら今まで彼を支えてきた多くの人間は大変なことになつてしまふ。

申し訳ないのですが、こちらの事情も理解していただきたい」それだけ言って山根さんは帰つて行つた。

わたしはどうすればいいのか、どうしたらいいのか、何も考えが浮かばず、放心状態のまま、暗くなつた部屋の中にいた。

どの位の時間が経つたんだらつゝもうすぐ拓斗が帰つてくる時間だ。ごほんの用意をしなくちゃ・・・

「ただいま」

「あ～おかえり～」わたしはつとめて明るく元気にふるまつた。

「海憂、今日は、いい仕事ができたんだよ・・・

拓斗が話しかけてきたけれどその時、彼がなにを言つていたのかなんて覚えていなかつた。

海憂、なんか元氣ないな?どうしたんだろ?

俺は唇間、山根さんに言われたことは海憂には言わないと決めていた。

た。

俺は、事務所を辞めさせられても俳優の世界から追放されたとしても彼女と結婚しようとした。

そのことで引退なんてことになつてもかまわないと思つていた。

海憂と2人で石吹に帰つて、そこで彼女とずっと一緒に暮らして行こうとそう堅く決めていた。

俺がもうすぐ25歳、海憂がもうすぐ30歳をむかえる頃だった。

page 25 - 悲しい決断 - (前書き)

- 海憂 第2章 -

チチチチチ・・・

俺は騒がしい鳥の声で田^たがさめた。
隣で海憂が寝ている。

そんな、彼女の寝顔を眺めていた。

「海憂・・・」

「うん?」

半分寝ぼけ顔の彼女の唇に俺はキスをした。

「海憂・・・海憂・・・俺は彼女を軽く抱き寄せて彼女の胸に自

分の顔を埋めた。

細く華奢な彼女の体は綺麗だった。俺はたまらなくなつて彼女を抱いた。

ゆっくり優しく、今までにないくらい彼女のことを抱いていた。

「海憂・・・」「うん?」

「・・・・・結婚しないか?」「

「えつ?」

「俺と結婚してくれ・・・」

「拓斗・・・」「本当に?」

「あ~まじでだよ・・・」

「あ、ありがとう・・・」

「拓斗・・・」

「うん?」

「少し、少し考え方させてくれる?」

「あ・・・わかつた、いい返事待つてる

「ありがと・・・」

海憂からの答えがどう出なかつたことが俺はちょっと気になつた。

結婚か・・・

思いがけない言葉だつた。そりや、拓斗とこのまま結婚出来るなんてすごく嬉しいことなんだけど。

ずっと、ずっとわたしが待っていた言葉でもあるんだけど・・・。でも、これからって時の彼をわたしが独占していいのかな?この子のためにも父親が必要なのかもしれないけれど・・・。どうしたらいいんだろう?

これから拓斗のことを考えるとわたしなんかが彼のそばに居てはいけないんじゃないとも思つ。

彼をこんなに好きなのにね・・・。彼の子供もいるのにね・・・。わたしの気持ち複雑だった。

俺が海憂にプロポーズしてからの1週間、俺は『えられた仕事をこなし海憂はいつものように仕事へ出かけ

普段となんら変わりのない生活を過ごしていた。

ただ海憂は悩み事もあるのか、なんとなく元気がなかつた。1人で考え込んでいる時間が多くなつていた。

彼のプロポーズを受けてからそろそろ1週間が経つ。いろいろいろいろ悩んだけれど、からの彼のためにわたしは彼の前から消えていく事を決めた。

彼と離れるのは身引き裂かれるほど辛いことはわかっている。でも、わたしにはこの子がいる。この子が一緒になんに辛くても寂しくても悲しくてもきっと生きていける。きっと強くなつていける・・・。

「海憂?この間の返事そろそろ聞かせてくれないか?」俺は彼女に聞いた。

「・・・・・・」

「拓斗、ごめんな、わたしあなたとは・・・結婚できない・・・」

「えつ？」海憂の意外な言葉に orehe はとてつもなく驚いた。

「海憂？ なんで？ なんでだよ・・・？」

「拓斗・・・、あなたは今が一番大事なとき、その若者でこんな年上のわたしなんかと結婚したら、

また1年前と同じようになつてしまつ。

あの時、あなたは強がってはいたけれどどこか辛そうだった。わたしはそんなあなたをそばで見てこるのがつらかった。怖かった。このまま、あなたがダメになつてしまふんじゃないかとすごく不安だつた。

せっかくここまでぼりつめたあなたの人生をわたしなんかのことでなくしてほしくないから

だから、わたしは拓斗とは結婚できない・・・」めん、めんね・・

・」海憂は俺の前で泣き崩れた。

「海憂、海憂はそれでいいのかよ？ 俺のこと愛してくれてるんじやなかつたのか？ 俺たちの関係つてそんなに軽いもんだつたのか？」
海憂はただ泣いていた。

「海憂、もう一度考え方直してくれないか？」

「拓斗、拓斗、わたしはあなたのことずっとずっと見てこれた、あなたのそばにずっと居られた、愛して愛されて、わたし幸せだったよ」

「だつたら答えは出てるじゃないか・・・」

「でもね、だめなんだよ、わたしがあなたのそばにいちゃだめなんだよ・・・」それだけ言つて海憂は寝室へと入つていった。

俺は彼女の寝ているそばに座り込み、彼女の寝顔を眺めていた。ただ茫然と彼女の顔を見ていた。

そしてそれがこの部屋で彼女の顔を見る最後の日になつたんだ。

—海憂第2章—

海憂の細い指が俺の髪をそつとなでる・・・
海憂の小さな唇が俺の唇に触れる・・・
次の瞬間、海憂が泣いている・・・
どうした？海憂？海憂・・・？

パペペペペペペペペペペペペペ

「！？」夢か・・・やな夢だつたなあ～

今何時頃だ？俺はそばにある時計を止めた。

「10時15分？・・・」

「やべ～起きなきや」俺はあわてて起き上がった。

今日は、たしか11時半から打ち合せだと山根さんが言ってたな。
「おい、海憂？なんで起こしてくれなかつたのさ～海憂？」そこに
彼女の姿はなかつた。

テーブルの上に一通の手紙が置いてあつた。

*拓斗へ

おはよ、拓斗。朝はんは用意してあります。ひゃんと食べていいく
んだぞ・・・

拓斗、今までの7年間、いろんなたくさんの出来事があつたけれど
どれも素敵な思い出でいっぱいです。

あなたと出会えてわたしは幸せだつたよ。

7年前の夏の日、あなたと出会ってあなたと恋をしてあなたといっし
でともに過ごさせてこれたこと

今のわたしには全部全部、宝物です。

こんな形であなたとよならすること許してね・・・。

あなたはあなたの思うように生きていてほしこ・・・。

あなたがもつともっと素敵な俳優さんになれる」と、遠くで見守つ

ています。

拓斗、今までこんなわたしのそばにいてくれてどうもありがとう。元気でね。わたしはきっとあなたのことが一生忘れません。ずっとずっと愛しているよ。

-海憂-

俺は目の前が真っ暗になった。やつるのは夢じやなつかったのか？まさか・・・「海憂！！」

いた。彼は彼の妻の死を嘆いていた。

וְשִׁלְבָּדָה וְלֹא

「もしもし？海憂？海憂か？」

「拓斗？」その声は海憂ではなく三咲さんの声だった。

「今日の打ち合わせ時間、相手の都合で繰り上がって10時30分になつたからな。早く支度して来て来いよ！」ガチャ！

卷之三

今の自分の立場を恨んだ。

たはすなのに
・
・
・

海憂　いさだしお前にどこに行こうでしまったんだ？

「と、いう事だ・・・わかつたか？拓斗？」

「おい!何を考えている?」山根さんのどなり声でおれはハツとし

た。

「は？ なんでしょうか？」

「お前なあ～・・・」

「だから、一週間後、お前はロケに行くんだよ

「ロケ？」

「そうだよ、今度のお前の映画、その企画でアメリカにロケに行くんだ」

「アメリカ？」

「そうだ、む二ひ一年間、みつちり役者修行をじつつ、アメリカでロケをしていい映画を撮つてくれるんだ」

「えつ？」

「有無は言わせんが、これは前々からお前にあった仕事だったんだからな」

そつ、それは1年前、俺がドタキヤンした映画の企画だった。

その映画の監督さんが俺のことをビリしても起用したいとずっと考えてくれていた。

俺は海憂のことがあつたから映画の出演は断つっていた。

海憂を失つてしまつた今、アメリカに行つて勉強するなんていい機会かもしれない、海憂のこと、忘れられるかもしれない・・・

そう思った俺は、その映画の出演と役者修行を受けることにした。

アメリカにいくまでの1週間、ずっと海憂の携帯に電話してみても答えはいつも一緒に「おかげになつた電話番号は・・・」だった。

俺はいろんなことを考えた。海憂がどうして俺に別れを告げたのか、どうして彼女のこと

引き止めることが出来なかつたのか、さまざまな思いが交錯するなか、俺は部屋を見回してみた。

彼女がないその空間はいじょうなほど広く感じられ、俺の心は張

り裂けそうになつた。

海憂がここにいない、その現実をたたきつかされた気がした。彼女を無理して忘れることがなんてできやしない。

このロケから帰国したら、俺はぜつたい彼女を探し出して、そしてもう一回プロポーズをするんだ。

今度こそ、今度こそ、絶対に彼女と一緒になつてやるーたとえ世間の人を敵にかえてまでも・・・

彼女が居なくなつたその部屋で俺はこの道からきつぱり引退しよう
とそう思つていた。

page 27

-会いたい- (前書き)

—海憂^{みゆう}第2章—

拓斗のいる東京からここ吹島に帰ってきてから1週間が経つた。その間に彼からの連絡は毎日のようにわたしの元へと届いていた。わたしは何度もその電話を取ろうと思った。

でももしその電話を取つて彼の声を聞いてしまつたらこの子を1人で産んで1人で立派に育てようという決心がにぶつてしまつ。彼にまた負担をかけることになつてしまつ。

1週間のうち、電話は2度となることはなかつた。これで本当に彼とのことは終わつてしまつんだろうな・・・

そう考えたら涙があふれた。

「赤ちゃん、ごめん、ごめんね、泣き虫ママで・・・」

いつしか時間はゆっくりと流れ彼との別れから半年ほど経っていた。わたしはその日大きくなつたお腹をかかえ、海岸沿いをゆっくり散歩していた。

近くのコンビニに立ち寄つた時、ふと目にした雑誌に彼のことを伝える記事が載つていた。

古坂拓斗 映画撮影快調に進む！

ここにとこり体調をくずしていたわたしはその記事に堂々と映つている笑顔の彼の写真を見て嬉しかつた。

「拓斗、頑張つてるんだな・・・わたしも頑張らなきゃいけないな・・・」そう思つたとたん涙が出た。

拓斗会いたいな・・・会いたいよ・・・拓斗・・・

なにをメソメソしてゐるんだろ・・・赤ちゃんに笑われちゃうよね・・・

海憂、もうひと踏ん張りしなきやね・・・

拓斗が頑張ってるんだから、わたしもこの子を守るために頑張りなきや・・・。

それから母なくしてわたしは子供を産んだ。

身長48センチ 体重2800gの男の子だった。

わたしはその子に海斗かどと名づけた。

最初のうちにはなんだかわからずただもう無我夢中で彼を育っていた。

夜泣きをしたりきゅうに熱をだしたり、寝る暇なんかないほどにただただ夢中になつて・・・。

わたしと拓斗の間にできた、海斗・・・愛おしくてしかたがない・・・。

・。あなたはわたしの宝物だよ。

なにがあつてもあなたのことはママが守つてみせるからね・・・。

海斗が寝返りをうつり、そして這い這いをし、つかまり立ちをし、かたことの言葉を話すよみになり少しずつ大きくなつていく姿をみてわたしはこの上なく幸せを感じていた。

この子を守つてきてよかつた、この子を育てられてよかつた、わたしは海斗をえいればなにもいらなし。

海斗が元気でわたしのそばにいてくれるだけで、それだけでいい。わたしは海斗に育てられているんだな、彼がいるから強い気持ちでいられるんだ・・・。

「海斗、お散歩についてみよう!」

「あい」かわいらしい手がわたしの手をつかむ。

わたしは海斗の真っ赤なかわいいほっぺたにキスをして海斗と一緒に海へ散歩に出かけた。

「まあまあまあ」海斗がわたしの手をこぎりながらよつよつと歩き出した。

海斗、大好きだよ！

わたしは小さな海斗の手を握り、拓斗との思い出がいっぱいの海岸を歩いていた。

「海斗、ここはね、ママとあなたのパパとの思い出がいっぱいいっぱい詰まっているところなんだよ」

「？」幼い海斗はちよこんと首をかしげて不思議そうにしていた。

—海憂第2章—

海憂と別れて1年間、俺は役者修行を兼ねながらアメリカで映画の口ヶをしていた。

こつちはいろんなものやいろんなことがすべて日本と違ひスケールがでかかった。

俺は、毎日毎日、驚きの連続だった。自分という人間がちっぽけに見えていた。

いろんな風景を見て、いろんなことを学んで、俺は俺なりに成長していったんだと思う。

周りのスタッフの絶大なる協力を得て1年間の海外口ヶと武者修行？は無事終了した。

「拓斗、お疲れ～」

「よく、頑張ったな！」

「山根さん・・・ありがとうございます」

「どうなることかと思つていたが、たいしたもんだったぞ！」

「はい、ありがとうございました」

「明日から2週間OFFを取つてある、ゆっくり休んで、充電しておけ！」

「はい、わかりました」

「じゃ、お疲れさん！..」山根さんは珍しく上機嫌だつた。

「は～疲れたら～」俺は空港からまっすぐ家へと帰つた。

明かりが灯つていらないその部屋はいつもと変わらずそこにあつた。

「1年か～、長かつたような短かつたような・・・」

疲れてきつているはずの俺はその部屋に入つたとたん疲れが取れるような錯覚を覚えた。

そこは海憂と別れて1年以上は経つてゐる場所なのに・・・

海憂が残していった様々なもの達が俺のことを優しく迎えてくれた気がしたからだつたのかもしれない。

海憂、今頃お前はどこでどう暮らしているんだ？元気でやつているのか？石吹島に帰つたのか？

俺はなんだかせつなくなつてみつともない位の勢いで泣き出しだまつた。

海憂・・・海憂・・・俺は彼女の名前をなんども呼び返していた。

！ピンポーン！

小一時間ほど経つた頃だらうか？玄関のチャイムが鳴つた。

「だれ？」俺はぶつきらぼうにドアを開けた。

「お～！」

「ま、雅弥～」

「こんちは～」

「美咲ちゃん？」

「拓斗、元気だつたか？」そこには雅弥と美咲ちゃんが立っていた。

「久しぶりだな～」さ、上がつて上がって、なんにもないけどさ・・

・

「おじやましま～す！」

雅弥と美咲ちゃんは2年前に結婚していた。美咲ちゃんのお腹が大きくなつていた。

「雅弥？ひょつとして？」

「あ～もうすぐ産まれるんだよ」

「そか、おめでとうな、やつたな雅弥、お前もとうとう親父になるのか・・・」

「照れるから、そういうふうと言つなかつてー！」

2人の再会はなんだか楽しくあつといつ間に時間が過ぎていつた。

「拓斗・・・」

「うん？」

「実はな・・・」

「なにあらたまつて・・・」

「うそ、おやつさんがおやつさんが・・・」

「おやつさんが、じうかしたのか?」

俺はショックだった。

俺が高3の夏休みにバイトに行っていた海の家 潮騒のオーナーだったおやつさんが先月亡くなつたという知らせだつたからだ。海憂と出合つきっかけになつたあの海で元気に働いていたおやつさんの大きな笑い声が聞こえてきやうで俺は辛くなつた。

「明後日俺は美咲とおやつさんとのこへ行くと思つてゐるんだが、お前、どうするよ?一緒に行くか?」

俺はしばらく考えていた。あの海へ行くところはまだやあつなしでも海憂との思い出が甦つてくるだろう。おやつさんの死に加え、海憂との思い出の場所に行くことには、俺には辛いことだ。

「悪い・・・俺は多分行けないと思つ・・・」

「そつか、仕事なのか?」

「うん、まあ・・・」

「わかつた、じゃ、俺たち2人で行つて来るから・・・」

「あ〜、女将さんにもよろしく伝えておいてくれよ・・・」

「はいよ」雅弥たちは帰つて行つた。

おやつさん、おやつさん、なんで、なんで・・・俺はふたたび泣き出してしまつた。

かつて悪いよな〜俺・・・情けない・・・海憂がいたりやつて、俺の尻をけつとばしていただろう・・・そんなことを想像してみたらなんだかふにおかしくなつてきて久

しぶりに俺は笑い出していた。

きっとたぶん、海憂が出て行つた先は石吹島なんだろうと思つ。

俺は1年前のあの日からアメリカに行くまでの1週間、彼女の居る場所へ行こうと思えば行けたんだろう・・・。

でもそれをあえてしなかつたって事は今回のこのアメリカ強行武者修行＆映画撮影をじうしてもしてこなきやだめよつていう海憂の言葉にならない声を俺がなんとなく感じていたからなんだろうと思つ。

でも、ここに帰つてきた今、俺は迷わず彼女が居るであろう石吹に行つてみることに決めた。

明日、明日、石吹島に行ってみよつ、おやつさんにおひでちやんとお別れをしてこよつ。

俺はすぐさま、石吹島へ行く準備を整えていた。

- 海憂 第2章 -

石吹島の海は5年前とまつたく変わらず、その海の青さをそこに湛えていた。

俺は、海の家 潮騒までの道のりを歩いていた。

「ひんちゃん~」

「は~い」

「あら~、拓斗くんじゃない?」女将さんが驚いた様子で俺のこと

を呼んだ。

「あなたの活躍見させてもらつてるわよ、立派な俳優さんになつたわね~」女将さんは涙を浮かべていた。

「おやつさんに、会いにきました」

「そり~どうもありがとね・・・」女将さんが俺を家の中へと招き入れてくれた。

そこには満面の笑みをたたえたおやつさんの写真が飾つてある。俺は線香に灯をともし、両手を合わせた。俺は、涙がこぼれそうになるのを必死でこらえていた。

「わざわざ遠くから来てくれてありがとうね・・・主人もきっと喜んでいるわね・・・」女将さんが言った。

「拓斗、久しぶりだなあ~元気にやつてたか?」聞き覚えのある声がした。康さんだった。

「康さん!~ご無沙汰してしまって、元気でしたか?」

「お~、しかしお前も立派になつたなあ~拓斗!~まさか、お前が俳優になるなんて思つてもいなかつたぞ」

俺はなんだか照れくさくなつて思わず苦笑いをしてしまつた。

「なんか、お前もいろいろとあつて大変だつたな」

「え～まあ・・・」それからじぎまぐらの間、女将さんや康さんとおやつさんのことや雅弥のことやら話をした。

女将さんも康さんも俺に気を使ってくれていたのだろう。2人とも海憂のことばになつたに口にしなかつた。

「さて、そろそろおないとまします

「そう、もう帰るのか？」

「泊まつていけばいいじゃない」

「ありがとうございます、でもちょっと俺、寄つて行きたいところがあるんです」

「そ、じゃ、仕方がないわね、わざわざ来ててくれてありがとね、拓斗くん」

「拓斗、またいつでも遊びに来いよー。」

「はい、康さんも女将さんも元気で・・・それじゃ、また失礼します」

す

俺は海憂の家があつた方角へと歩き出していた。

海憂がそこにもしかしたらまだ住んでいるかもしれない。

海憂の思い出がそこにまだ残っているかも知れないとほのかな期待を胸に抱いて。

海憂の家へと向かう海岸沿いに、海憂と同じ年頃のような女人と、まだ小さくてかわいい男の子が歩いていた。

よつやく歩き始めたばかりなのだろうか、よつよつと今にも転びそうになりながら歩いている。

俺がその親子連れの横を通り過ぎようとした時、その子供が転んだ。母親であるその女人はその子の名前を呼びながら駆け寄つて行く。「ウワ・ン、ウワーン」「海斗、海斗、そんなに泣かないのほら、チチンプイパイ、痛いの痛いのとんだけー！もう治つたでし

「う、海斗」

海斗？どっかで聞いた事がある名前だな・・・

「ね、拓斗？」

「うん？」

「もしも、もしもあなたとわたしの間に子供が出来たら、名前、なんてつける？」

「えへ、俺はまだ子供のことは考へてもいないなあ～」

「まさか、出来たのか？海憂？」

「もしも、もしもの話よ・・・」

「そうか・・・」

「わたしはね、もし男の子が出来たらあなたの斗とわたしの海をたして海斗かいとってつけたいの、でね、女の子だったら夏海なつみってつけたいんだ、夏の海で拓斗に出会ったから・・・単純かな？」

「いいんじゃないの、海憂らしくって
「ばかにしてるんでしょ？」

「・・・俺は驚いた。まさか・・・。

そこにいた女性はまぎれもなく海憂だつた。

「海憂！」「海憂！..」

「！？た、たくと・・・・・たくとなの？」

「海憂！』

「拓斗！』

俺は無我夢中で海憂がいる方向へと走り出していた。

俺たちは吸い込まれるように抱き合つた。俺は彼女をきつく抱きしめた。

「みゆう・・・会いたかった、ずっとずっと会いたかった」

「わたしもだよ、わたしもずっとずっとあなたに会いたかった、夢

?夢じやないよね・・・

「夢なんかじやないよ、海憂、俺はここにいる・・・」

しばらく海憂を抱きしめていた俺の視線の中に小さなかわいい男の子の視線が飛び込んできた。

「海憂?この子、もしかして・・・?」

「うん、拓斗、この子はこの子はわたしとあなたの間にできた子だよ」海憂が優しく微笑んだ。

「えつ?まじ?」

「うん、まじ・・・」

「海斗・・・」海斗は初めて見た俺のことを見て泣きそうになつた。

「海斗、ほら、泣かないよ~この人はね、海斗のパパだよ

「ぱ?ぱ~」

「そうだよ、海斗」海憂が海斗を抱っこした。

俺は初めて見るわが子の顔を見て涙が浮かんできた。

「海憂・・・」

「うん?」

「あ、ありがと・・・」

「拓斗・・・」

「うん?」

「黙つててごめんね、あの時、あなたと別れようと決めた時、もうこの子はわたしのお腹のなかにいたの・・・」

「海憂、なんでなんでそんな大事なこと黙つてたんだ?」それから海憂は小さな海斗を抱いたまま

そうしてしまつたいきさつを話しあじめた。

山根さんが海憂に別れろって言つたことや、どうして俺が海外なんかに行くことになつてしまつたのかとかを・・・。

山根さんは俺を海外口ケに行かせ、もつといい役者になれるよう修行をさせようと教えていたらしく

そのためには海憂を俺から引き離し、海憂のことを俺から忘れ去らせたくて半ば強引に海外まで俺を引っ張り出したんだと・・・

すべてのことをわかつた上で海憂は考えに考えぬいて俺と別れる決心をしたんだ。

海憂はそのとき、海斗がお腹にいてくれたからビーナスかやつてこれた、この子を絶対、守っていくんだと
そういう気持ちが強かつたからこじままで生きてこれたと俺にそう話した。

海憂の家に着いた。そこは海憂を初めて抱いた8年前となんら変わつてはいなかつた。

しいていえば小さな子供がいかにも楽しげに遊んでいた、そんな優しい空間が広がっているそんな感じの家になつていた。

小さな洋服や、かわいいぬいぐるみ、ミルクの匂い。俺にとってはなにもかもが新鮮に映つていた。

海斗が寝静まつたその夜に俺は海憂に2回目のプロポーズをした。
「海憂、今度こそ今度こそ、俺と結婚しよう、もう2度と2度とお前をビームもやらない、離さない」

「やつとつかまえた俺の海憂・・・」「永遠にきみと一緒にいたい・
・・

「拓斗、ありがとう、もう2度と離さないでね、ビームにも行かないでね、ずっとずっとわたしのこと捕まえてね・・・」

「あ～約束する、海憂、もう2度とお前の手を離さないよ・・・」
俺は海憂の唇に自分の口を押し当て強く強くキスをした。

海憂の体は白かった。やつと手にいた俺の海憂。

俺は今まで彼女と離れ離れになつてしまつた1年間の時を取り戻そ
うと無我夢中で彼女を何度も何度も抱いていた。

もう2度と離れない。海憂のことは俺が一生かけて守つてやる。俺たちとはいつまでもいつまでも抱き合いでして愛し合つた。

彼女のその細い手首には俺が彼女に初めてプレゼントしたターコイ

ズブルーのブレスレットが青く綺麗に光っていた。

page 30 - 幸せ・・・(前書き)

—海憂^{みゆう}第2章—

海憂と再会してから半年後俺たちは結婚した。

結婚式は海の家 潮騒の仲間や雅弥、美咲ちゃん、愛実たちが盛大にやつてくれた。

海憂は真っ白なウェディングドレスを着て長いベールをまとい真っ白なブーケを持つてとても嬉しそうな顔をしていた。そのドレスは海憂の細いウエストを際出させていた。海憂、こんなに細かったのか・・・。俺はそう感じていた。

「では、指輪の交換を・・・。」

俺は海憂の細い指に指輪をさして海憂は俺のじつい指に指輪をはめて・・・。

俺達は正真正銘の夫婦になつたんだ。

海憂は瞳いっぱいに涙をためてとても幸せそうな顔をした。その様子をちいぢやな海斗が不思議そうに眺めていた。海憂、幸せにするよ・・・。俺はあらためて誓つていた。

「古坂拓斗さん、あなたは病めるときも健やかなるときも妻、帆苅海憂さんを守つていく事を誓いますか?」

「はい、誓います」

「帆苅海憂さん、あなたは病めるときも健やかなる時も夫、古坂拓斗さんを守つていく事を誓いますか?」

「はい、誓います」

「では、誓いのキスを・・・」

ちょっと遠回りをしあがたけれど、俺と海憂と2人の人生は今やつと始まつたんだ。海斗という一番の宝物と一緒に・・・。

結婚式から数日後、俺は今まで俺を支えてくれたスタッフや山

根さん達に1通のファックスを流した。

その事でいろんな人や山根さんには思いつきり迷惑をかけてしまつたけれど。

私は、古坂拓斗（26歳）は長年付き合つてきた帆苅海憂さん（31歳）とのたび結婚式をあげたことをご報告致します。結婚をきっかけに私は兼ねてから考えていた海の家の経営者として石吹島に渡ることになりました。

この芸能界での仕事はここで引退といつ形を取る事にしました。スタッフ及び私を今日まで支えてくれた多くのファンの皆様、今までほんとうにありがとうございました。ほんとうに最後まで自分勝手な行動をしてしまつたこと深くお詫び申し上げます。

古坂拓斗 海憂

古坂拓斗、海憂さん結婚へ！秘められた愛、2人の8年間の純愛物語

古坂拓斗、人気絶頂の今、突然の引退！その真相は？

「ほら～拓斗～テレビでまたあなたのことがつてるよ」海憂は二口笑つている。

「もう俺には関係のないことだよ・・・俺は今、海憂と海斗と一緒に生きている・・・」

「後悔してないの？」

「まったく！」きつぱり言った俺のその一言

「また、強がり言つてる・・・ふふふ・・・と海憂が笑つた。

海憂が31歳 僕が26歳の時だった。

君がいる

僕は正しいの？それとも間違つてゐる？

もがきながら本当は過(け)じていた

なのに すべてを 君は抱いて

”じいじともあなたよ”と言つてくれた

小さな君が 僕の 大きな宇宙さ

ありがとつ するに僕も 愛してくれて

もう大丈夫だから

やつと 気づいたから

なんにもなかつた 僕には

君がいる 君がいる

なにか つかもうと 駆け抜け さまよつてた

傷つけたり 淋しくさせたね

なのに 笑つて 僕のために

”思つようになきて”と言つて泣いた

うつむく君が 僕の 輝く未来さ ごめんね

夢や日々を いいわけにしてて

もう 大丈夫だから

やつと 一人きりだ

探し求めてた 場所には 君がいる 君がいる

だから 生きてゆく 一日一秒も長く

君に返してやきたい 失った時間と笑顔を

小さな君が 僕の 大きな宇宙さ ありがとう
愛のすゝじを 教えてくれて

もう 大丈夫だから ずっと 離さないよ

たどりついたとき心に 君がいる 君がいる

(君がいる ー

Last page

- ハローゲー (前書き)

—海憂^{みゆう}第2章—

海憂が31歳、俺が26歳の時、やつと2人で一緒に人生がやつて
いけると思つていきました。

海斗と海憂と俺との生活は幸せに満ち溢れていました。

彼女と再会する前に僕は海の家 潮騒に立ち寄りおやつさんに挨拶
をしました。

すごくお世話になった人だつたから。

俺がそこを後にした時、女将さんが康さんに言つたそうです。
この店、拓斗君が継いでくれないかしら・・・つて。

俺はその事を結婚式の日に康さんから伝えられました。

その頃、アメリカ口ケまでして撮つた俺の映画は高く評価されていました。

でも、俺は彼女との結婚を決めた時から俳優の仕事は辞めようと思つていたから、なんの迷いもなくここ海の家 潮騒のオーナーを
引き受ける事に決めました。彼女はもつたいたいなあつてぼやいてたけどね・・・

当然、収入は減つてしまつことになりましたが、それ以上に大事なものがあつたから、俺は後悔なんかまったくしていませんでした。

海憂が33歳になつた頃、2人目の子供を授かりました。

でも、彼女は俺が若かつた頃、俺の浅はかな行動のために、俺自身も彼女自身もマスクミに常にマークされ気の休まらないかった時期がありました。その時の彼女は相当な気苦労を感じていたと思います。たぶん、そのあたりから彼女は少しづつ体調を崩していくんだろうと思います。

そんな事を感じていた俺は彼女に、2人目はあきらめないかつて言つてみたんです。

俺は海憂を失うかもしれないという不安にかられていたから。

でも、彼女はどうしてもこの子を産みたい、拓斗とわたしの子供なんだよ、なんとしてもこの世に産んであげたい……。

そう言つて、頑として首をたてには振りませんでした。結局、根負けした俺は海憂の願いを受け入れました。

その時の海憂の笑つた顔は向日葵のように明るく大きくみえました。どんなに俺が頑張つても母親には勝てないなあ～つてそう思つたことを思い出します。

そして産まれた女の子が夏海なつみです。

小さな小さなその女の子は海憂によく似ていました。

でも、その頃から海憂は体がますます弱くなつてしまい、それでも海斗と夏海を育てるのに一生懸命でした。

海斗が3歳、夏海が1歳の誕生日を迎える頃、彼女は亡くなりました。

「拓斗、この子たちを絶対守つてね、わたしの分も愛してあげて、たくさんたくさん愛してあげて……」
約束だよ……今までありがとうございました。海憂は幸せだったよ……「そう言い残して……」

最後の彼女の顔は美しく、母親になつて子供を育てられる喜び、幸せに満ち足りた顔をしていました。

俺は悲しくて寂しくて辛くて……海憂を失つてしまつた現実を忘れたかつたのを覚えています。

でも、そばではしゃいでいる海斗と夏海を見ていると、ここいらをきちんと守つていかなきや、育てていかなきや……。

そう思いなおしたりしていました。それが海憂との最後の約束だつたから……。

彼女との出会いから彼女が亡くなるまでの11年間はあつといつ間に過ぎていきました。

苦しい事のほうが多い多かったかな?なんて海憂はそう言つて笑つていて

るかもしれません。

でも俺も彼女もその時を一生懸命生きていたんだろうと思います。彼女が亡くなつてからもう1年以上経ちましたが、ときおり自分のそばで彼女の存在を感じる時があります。

彼女が優しく微笑んでいるような・・・そんな感じかな・・・。

生前、海憂がよく言つていました。もし、もしわわたしが死んでしまうようなことがあつたならわたしの骨は海に沈めてね・・・。わたしはそこにこいつでもいるから・・・と。

俺は彼女がそう望むならと彼女の骨の一部をその海へと沈めました。彼女の月命日には2人の子供を海憂が眠るその海へと連れてこきます。

海憂が子供たちの笑顔や元気な姿、成長していく様を見られるようにと思つて。

4歳になつた海斗は海で泳ぐのが大好きでその姿はまるで海憂の生き写しのようです。

2歳になつた夏海はおしゃまな女の子になつて、俺が少し落ち込んでいたりするとパパ、しつかりしなさい！なんてまるで海憂が話しているような口調で俺のことをしかりつけたりします。

この2人の子供たちが俺のそばに居てくれる限り、海憂も俺のそばで行き続けていてくれてんだろうとそう思つています。

海憂へ

たくさん愛情とたくさん思い出をありがとづ。

俺は君との過ごしたその日々を決して決して忘れる事はないと思う。

君が残してくれたこの子たちを俺は大事に大事に守つていきます。君の分までね・・・。

君の「」じ、守つあげるてやる」とが出来なくつていめん・・・。

海憂・・・俺は君と知り合えて良かつた。

君に愛されて君を愛して・・・愛して愛されて・・・

俺は俺はとっても幸せでした・・・。

海憂・・・

ほんとうにありがとひ・・・

拓斗

Last page — ハローゲー（後書き）

今回で海憂はラストを迎えました。

初めて書いた小説？だったので読みづらかった点が多くあったと思
いますが、ここまで読んで下さった皆さんありがとうございました。
今回の作品にご意見ご感想があればどうぞコメントを残していただきたいとおもいます。

本当にありがとうございました。

RYO 103

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3835c/>

－海憂（みゆう）－

2010年11月23日03時46分発行